郡山陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査

はじめに

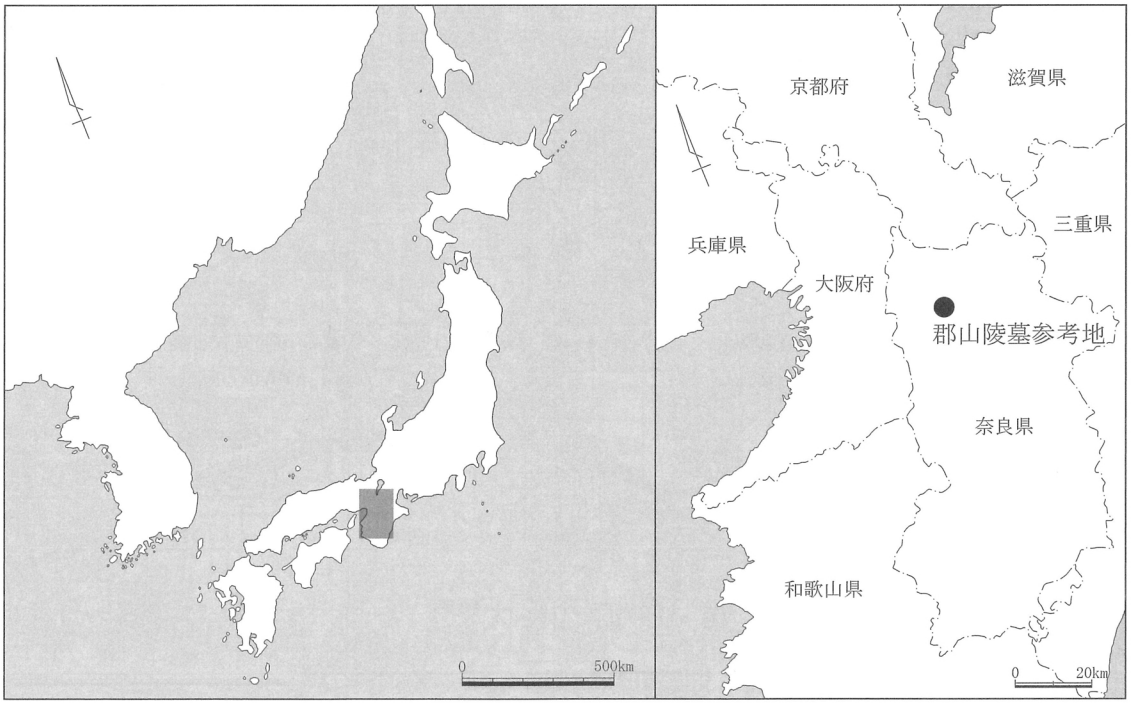
郡山参考地は奈良県大和郡山市新木町に所在する前方後円墳である（第１図）。遺跡としての名称は新木山古墳であるが、広陵町所在の三吉陵墓参考地（遺跡名称：新木山古墳）と区別するために、郡山新木山古墳などと呼ばれることも多い。

周辺の遺跡　当参考地は、東を秋篠川・佐保川、西を富雄川にはさまれた緩やかな丘陵である西の京丘陵の最南端に位置している（第２図）。なお、同じ西の京丘陵上には、当参考地の北方の高台に郡山城が築かれている。当参考地のすぐ北方に位置する箕山町内の遺物散布地では埴輪が確認されており、当参考地の埴輪と関連する可能性もないわけではないが、豊臣秀長による郡山城の整備の際に消滅した古墳などの存在が推測される。

また、当参考地は、立地や墳丘の側面観などからみて、先にふれた富雄川の水系に位置づけることが適当と考えられる。この富雄川水系には、当参考地から４㎞の範囲内に小泉大塚古墳（墳長 88 ｍの前方後円墳：前期前半）、富雄丸山古墳（直径 86 ｍの円墳：前期後半）、六道山古墳（墳長 100 ｍの前方後円墳：後期初頭）、割塚古墳（直径 49 ｍの円墳：後期前半）といった著名な古墳が築造されており、上であげたように郡山城周辺で消滅した古墳が存在していたとすれば、古墳時代をつうじて安定的な基盤をもっていた地域とみることも可能である。なお、西の京丘陵の東を画する佐保川が初瀬川と合流する地点の北方には額田部丘陵が存在しており、ここには松山古墳（直径 52 ｍの円墳：中期前半）、額田部狐塚古墳（墳長約 50ｍの前方後円墳：後期前半）などの古墳が築造されており、富雄川水系の古墳とともに当参考地との関係に注意が必要である(1)。

来　歴　当参考地は、明治 28（1895）年 10 月 10 日付の奈良県知事から宮内大臣にあてた御陵墓伝説地とすることを促す上申などをうけて、明治 30（1897）年９月 15 日に陵墓参考地として指定されている。

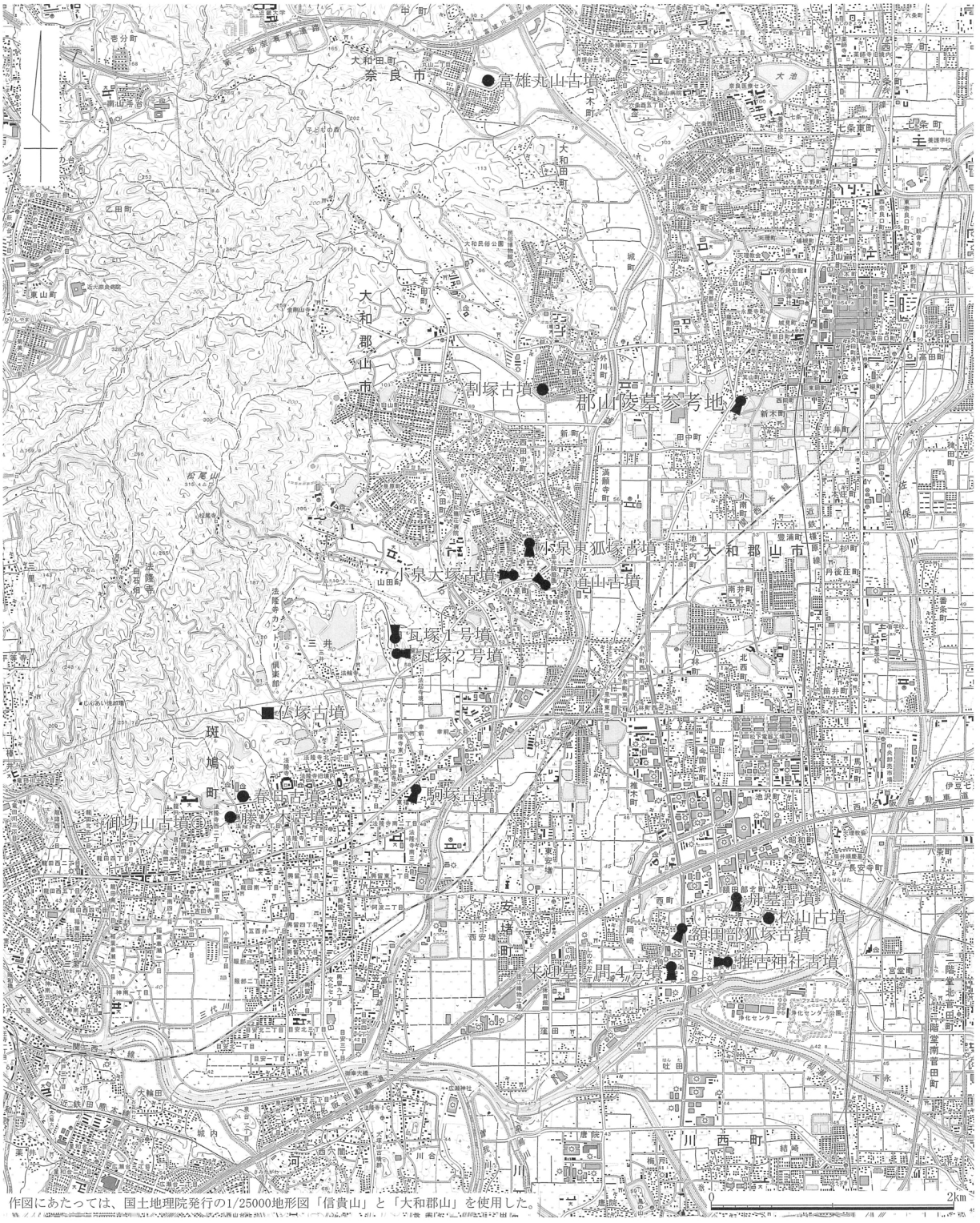
当参考地に関する記録としては、延宝９（1681）年に刊行された林宗甫による『大和名所記』（内題「和州旧跡幽考」）をあげることができる(2)。『大和名所記』第５巻の中に「美濃山二基陵　植槻の南　いずれ



第１図　郡山陵墓参考地　概略位置図（1/25,000,000、1/2,000,000）

の御代の陵にやしらず。此のわずか北にいぬづかというあり」という記載があり、「美濃山」と前述した当参考地の北隣に所在する「箕山」町が音通であることから考えてもここでいう陵が当参考地を指すものと考えられる。ただし、ここでいう「二基」の示す意味が、陵が二つあるという意味での「二基」であるのか、「二基」という名称（「新木」と音通）であるのかという点についてはどちらにも決しがたいが、いずれにしてもこの地にあった墳墓が当時、陵として認識されていたことには変わりがない(3)。

ほかには、柳沢文庫が所蔵する安政年間の絵図である『和州郡山藩家中図』の中に「新木山」と記載され



作図にあたっては、国土地理院発行の1/25000地形図「信貴山」と「大和郡山」を使用した。

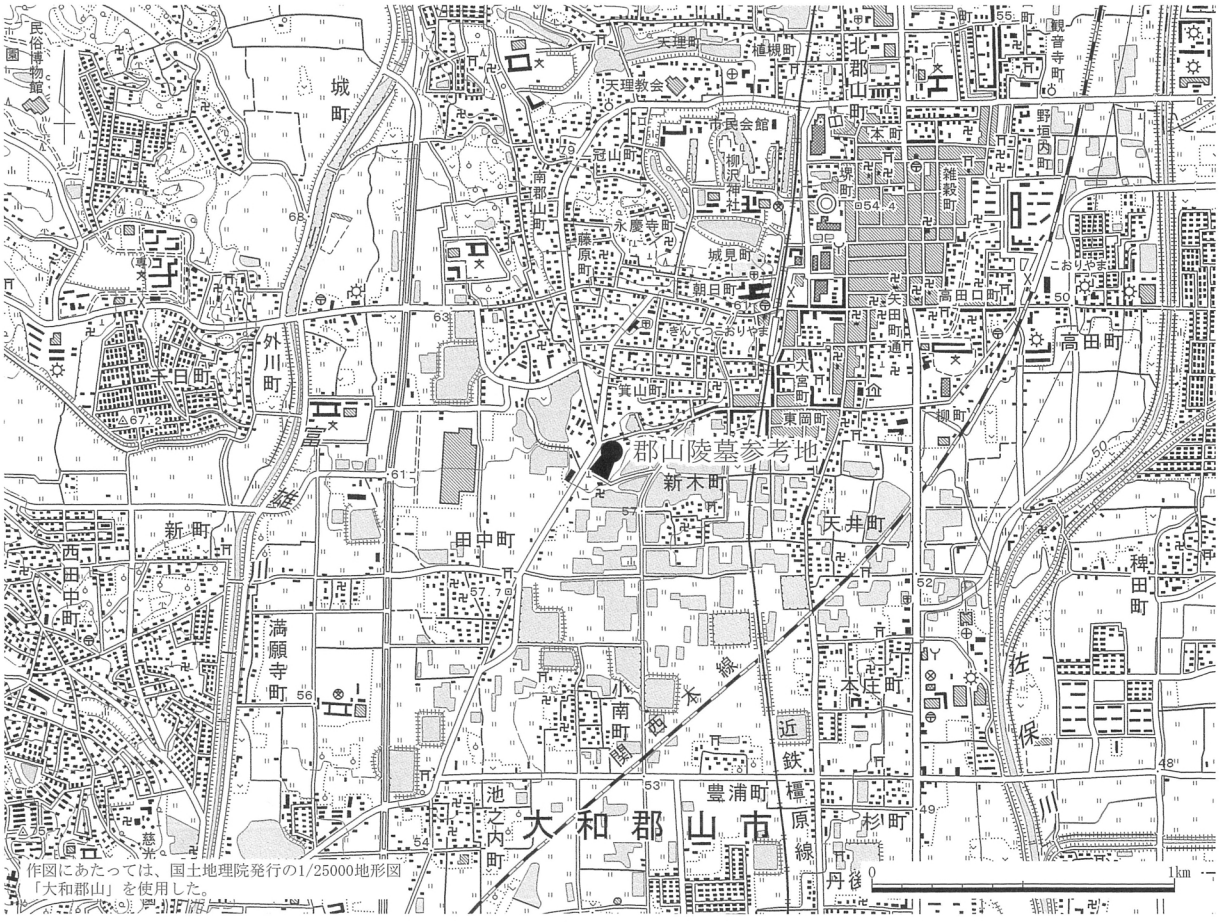
第２図　郡山陵墓参考地　周辺古墳位置図（1/50,000）

た墳丘をみいだすことができる[4]。また、明治５（1872）年に大和郡山県内の陵墓について取り調べた報告の絵図からは[5]、すでに現在の墳丘とほとんど差異のない状況を確認することができる（第４図）。さらに、明治 26（1893）年に刊行された野淵龍潜による『大和国古墳墓取調書』にも当参考地に関する記載がみえ[6]、「維新ノ後奈良街道改修ノ時北ノ一部ヲ切平均シ道敷トナセリ」という記述と今回の事前調査における第 10 トレンチの状況との関係が注目される。

なお、昭和 36（1961）年に末永雅雄氏は著書『日本の古墳』（朝日新聞社）のなかで、当参考地の南に所在する萬福寺内の墓地がある地点に前方後円墳が存在していた可能性を指摘している。今回の調査中にこの墓地については何回か踏査をおこなったが、古墳である手がかりを見いだすことはできなかった。ただし、先にふれた『大和名所記』における「美濃山二基陵」という記載からみても、興味深い指摘といえる。また、昭和 56（1981）年に平凡社から刊行された『奈良県の地名』では、当参考地の周辺に陪冢が数基存在していたことが指摘されている。これも『大和名所記』における「犬塚」の記載と関連する可能性がある。

既往の調査　宮内庁による当参考地の考古学的な調査は今回の事前調査が初めてであるが、周辺部分については地元自治体によって少なくとも二回の調査がおこなわれている。一つは、当参考地南側にあたる前方部前面の境界に隣接する水路を改修する際に大和郡山市教育委員会が昭和 61（1986）年に立会調査をおこなったものである[7]。この調査では地表下約 50 ㎝で地山の灰白色砂層が確認されており、後にもふれるが、今回の事前調査における第１・２トレンチの状況と矛盾しない。もう一つは当参考地の西側を走る県道９号線の整備時に奈良県教育委員会が立会調査をおこなったものであるが、これについては詳細不明である[8]。

墳丘の現況　従来の墳丘測量図（第６図）に基づく当参考地についての認識は、墳長が約 122 ｍで２段築成の前方後円墳といったものであった。今回の事前調査にあたっては、大正 10（1921）年に測量されてから更新されていなかった当参考地の測量図を新たに作成した（第７・８図）。それによれば、墳丘の東



第３図　郡山陵墓参考地　詳細位置図（1/25,000）

側や北側を主として全体にわたって著しい改変が加えられていることがわかる。こうした改変の影響もあってか、後円部の平坦面は小さく、後円部と前方部の高さの差は約１ｍとあまり差がないことが指摘できる。なお、現状から判断すれば前方部の前面については３段築成であるように観察できる。また、西側のくびれ部付近には造出の存在が推測され、従来の測量図（第６図）から判断して墳丘の周囲には盾形の周濠が存在していたことがわかる。なお、墳丘内では葺石に使用されたと考えられるような石材はほとんどみることができない。

従来の位置づけ　上でふれたような墳丘の現況をもとにしたこれまでの当参考地の位置づけは大きく二つにわかれる。一つは後期古墳とみる説であり(9)、もう一つは中期古墳とみる説であるが(10)、前者とみる意見が多いようである。

調査の経緯　当参考地についてはこれまで大きな工事がおこなわれることがなかったため、上でも述べたように墳丘部分についての調査がおこなわれることはなかった。しかし、壕水が存在する墳丘の東側から南側にかかる部分で浸食がみられることや、それ以外の部分の境界沿いに設置されていた進入防止用のコンクリート杭や木杭が経年による劣化で破損・倒壊してきたため、護岸や外構柵を整備する必要が生じてきた。そのため、工事に先立って事前調査を実施し、適切な工法の検討に資するための情報を収集することとなった。しかし、調査に先立って壕水を管理する水利組合と協議をおこなった結果、養魚で使用しているということもあり、壕水を一ヶ月以上落とし続けることへの了解が得られなかったため、護岸工事については断念し(11)、外構柵整備箇所の事前調査を実施することとなった(12)。　（加藤一郎）

１　トレンチの設定方法と基本的な層序

（１）トレンチの設定

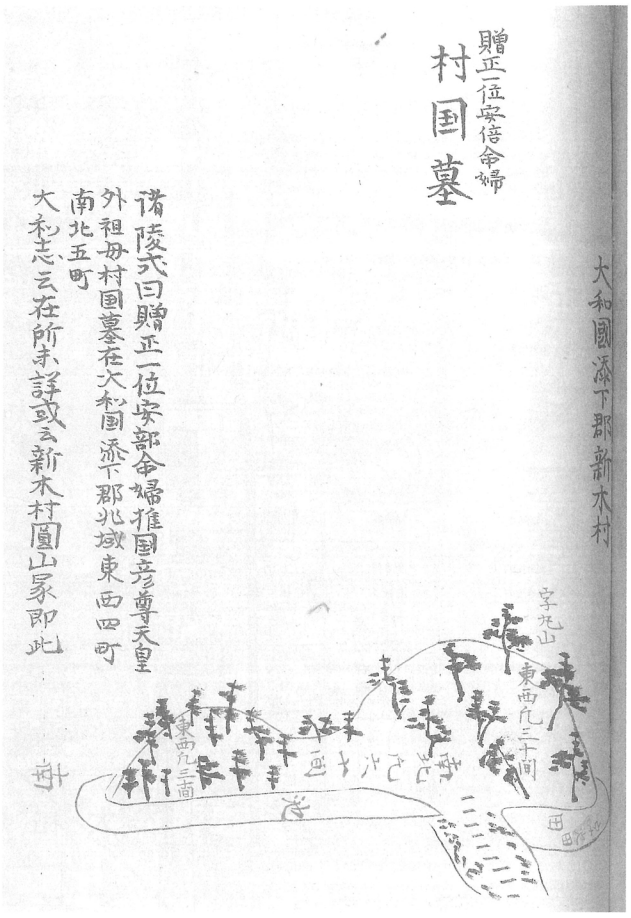
今回の事前調査の範囲は、上でも述べたように外構柵整備箇所であり、該当箇所に12のトレンチを設定した。おおむね墳丘の西側半分を中心として配置されている（第５図）。トレンチの設定にあたっては、事前に図上で配置を決定し境界標石および境界線とトレンチとの位置関係を計測しておき、それを現地での測量によって再現する方法をとったが、現地の状況によって当初の計画通りの位置になっていないトレンチもある。

なお、トレンチは前方後円墳の墳丘主軸線上にあたるトレンチを長めに設定し、墳丘の状況を把握できるように努めた。

（２）基本的な層序

今回の事前調査で認識できた土層の堆積状況は各トレンチでおおむね共通しているが、後述するように後円部でしか確認できない特徴的な土層があるなど、完全に同様であるわけではない。以下では、今回の事前調査において認識できた基本的な層序について述べておきたい。

Ⅰ層　表土および現代の盛土。その様相から以下の四つに細分できる。Ⅰａ層はいわゆる表土で、現在の墳丘表面を覆う腐植土層である。



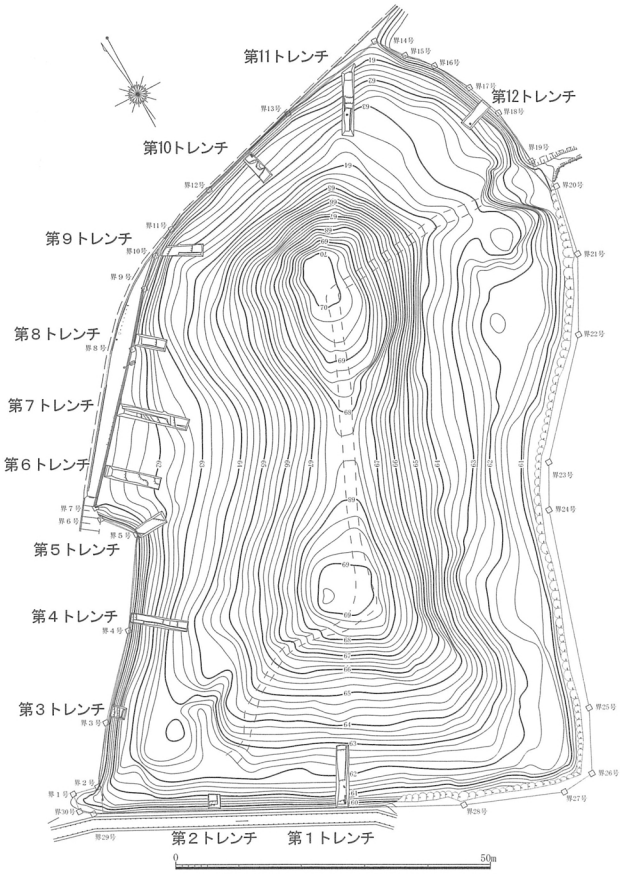
第４図　郡山陵墓参考地　『諸陵寮回議冊第一』所収絵図

Ⅰｂ層は第６～８トレンチで確認されている現代の盛土である。当参考地の西側を走る県道の歩道を整備した際の盛土と思われる（施工年度は不明）。Ⅰｃ層はⅠｂ層が形成される以前の表土で、第６・７トレンチで確認されている。Ⅰｄ層は第１トレンチで確認されている現代の盛土である。当参考地の南側の境界に隣接する水路を昭和61（1986）年に改修した際の掘方の埋土と考えられる。

Ⅱ層　浚渫土。第１～３トレンチで確認されている灰白色の粘質土である。前方部前面に周濠が広がっていた時期に濠内堆積土を浚渫した土層であると考えられる。現代あるいはそれに近い時期に形成されたものであろう。

Ⅲ層　後世の盛土。その土質・色調・形成時期などから以下の五つに細分できる。Ⅲａ層は第11トレンチのみで確認できる土層である。暗灰黄褐色土で砂利や粘土ブロックが混じっており、下でふれるⅢｃ～ｅ層を混ぜたような状況である。この層には明治期の陶磁器が含まれており、おおむねこの時期に形成されたものと判断される。Ⅲｂ層は第10トレンチのみで確認できる褐色の粘質土層である。高さ１ｍほどの単一な層である点が特色で、一気に造成されたようである。この層の形成時期は不明であるが、先にふれた明治維新後の奈良街道の改修に伴って削平されたとも理解できる地山面を覆う土層である。Ⅲｃ層は第１～８・12トレンチで確認できる。主に前方部を中心としてみられる灰黄色の粘質土層で、灰色の粘土ブロックを多く含んでいることが多い。なお、第３トレンチではこの層内における柱穴にもみえる不明遺構が存在するが性格は不明である。Ⅲｄ層は第４・５・７～９トレンチで確認できる黄灰褐色の粘質土層である。第５トレンチではこの土層内に炭の集中する箇所があり、寛永通宝が出土している。また、第７トレンチではこの土層の直上に薄い焼土層が確認されている。Ⅲｅ層は後円部の第９・11・12トレンチで確認できる砂利と砂からなる特徴的な土層である。

なお、Ⅲｃ～ｄ層については、土質や土色が異なるものの埴輪や近世遺物を含むという点で似たような時期に形成されたものと思われる。



第５図　郡山陵墓参考地　トレンチ配置図（1/1,200）

Ⅳ層　濠内堆積土。Ⅲ層形成時かそれ以前の周濠内に堆積していた土層で、第１・２トレンチにおいて確認されている。

Ⅴ層　墳丘盛土。第10・12トレンチを除く全てのトレンチで確認されている。その様相は場所によって変化しており、一定の傾向があるわけではない。基本的には地山にその起源があると思われるので、地山の違いによるものであろうか。なお、第４トレンチの最も墳裾側に近い部分では、砂質土と粘質土を互層状に積み重ねて墳丘を構築している様子が観察できる。

Ⅵ層　地山。全てのトレンチで確認されているが、礫層、砂層、砂質土層、シルト層、粘土層などが確認されており、その様相は一定でない。

（加藤）

2　各トレンチの状況

（1）前方部（第１～４トレンチ）

第１トレンチ（第９図、図版４）　墳丘主軸上の前方部前面中央に設けたトレンチで、長さ10ｍ×幅２ｍである。墳端、第１段斜面の葺石、第１段テラス（埴輪列含む）などが検出されること



第６図　郡山陵墓参考地　旧墳丘平面図（1/800）



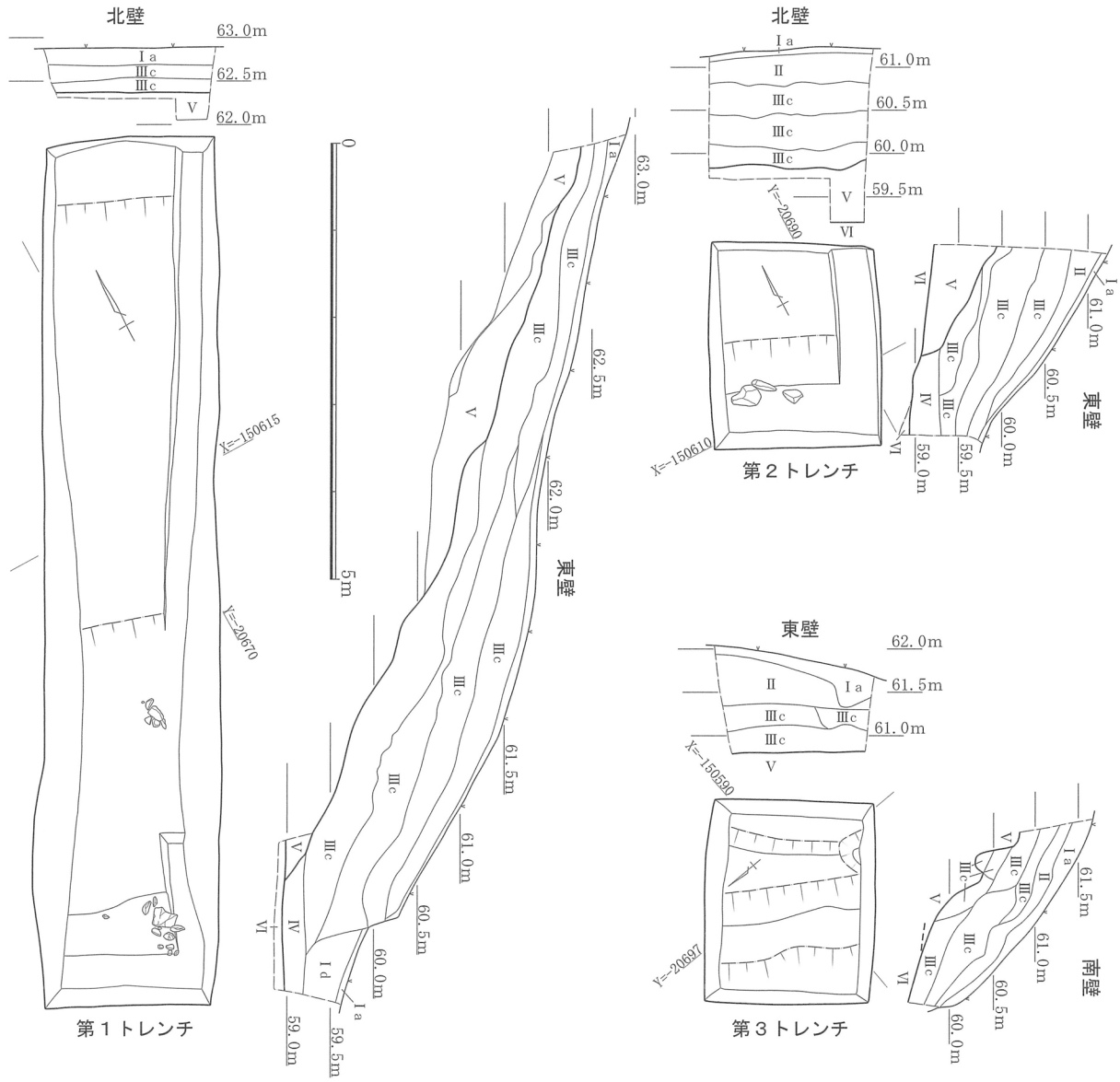
第７図　郡山陵墓参考地　新・旧墳丘平面図合成図（1/800）



第８図　郡山陵墓参考地　墳丘平面図・断面図（1/800）

を想定していたが、その多くは失われていることがわかった。

土層の状況は、墳丘側では表土（Ⅰａ）の下に部分的に浚渫土（Ⅱ）がみられ、後世の盛土（Ⅲｃ）、墳丘盛土（Ⅴ）と上から順に堆積している。周濠付近では表土（Ⅰａ）、現代の盛土（Ⅰｄ）、濠内堆積土（Ⅳ）、地山（Ⅵ）と上から順に堆積している。周濠側の地山直上では人頭大の礫が一つと拳大の礫が少量確認されている。残存状況がきわめて悪いが、ちょうど地山直上に墳丘盛土がほどこされていく境界に位置していることから、人頭大の礫が葺石の基底石である可能性が考えられる。これらの礫の評価については問題を残すが、墳端については水平な地山面に墳丘盛土がほどこされはじめることから判断して、おおむねこの位置であると思われる。なお、約２ｍ墳丘側の斜面でも墳丘盛土直上に拳大の礫が少量確認されており、これが第１段斜面の葺石となる可能性がある。これらの礫が第１段斜面の葺石であるとするならば、斜面の角度は28度となり、おおよそ他の古墳で確認されるような数値となる。しかし、仮に第１段斜面の葺石であったとしても、本来あったであろうその他の葺石が失われた理由をみいだすことは難しい。葺石が転落したとするならば、後世の盛土（Ⅲｃ）や濠内堆積土（Ⅳ）中に含まれてしかるべきであるが、これらの層を含めて今回の調査では掘削土中に礫を確認できることはほとんどなかった。なお、第１段斜面の角度が28度であっ



第９図　郡山陵墓参考地　第１、２、３トレンチ平面図・断面図（1/80）

たとすると、標高62.4ｍあたりが第１段テラス面であったのではないかと思われる。墳丘盛土上面がトレンチの北端で平坦になりつつあるのは、第１段テラスをある程度は反映したものである可能性がある。また、これらの礫が葺石であるとするならば、ぎりぎりの所で葺石が失われるような形での改変、言い換えれば葺石を損なうことを目的とするような改変がおこなわれたと考えることもできる。ただし、そのように考えた場合、その後、旧表土層が形成されずに堆積した後世の盛土（Ⅲｃ）がこれほどの厚みになっている理由をみいだすことが難しい。

遺物は、後世の盛土（Ⅲｃ）や濠内堆積土（Ⅳ）から埴輪片や陶磁器片が出土している。

第２トレンチ（第９図、図版５）　前方部前面中央と前方部西隅角の中間点付近に設けたトレンチで、長さ2.5ｍ×幅２ｍである。土層の状況は、上から表土（Ⅰａ）、浚渫土（Ⅱ）、後世の盛土（Ⅲｃ）、濠内堆積土（Ⅳ）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。このトレンチでも第１トレンチと同様に、地山直上に墳丘盛土がほどこされていく境界付近に人頭大程度の礫が三つみられる。これらについても第１トレンチと同様に葺石の基底石であった可能性があり、ほぼ水平な地山面に墳丘盛土がほどこされはじめることを考えると墳端についてはこの位置であったものと判断される。なお、東壁断面図では墳丘盛土（Ⅴ）が地山（Ⅵ）から急激に立ち上がるようになっているが、これはこの断面図作成部分のみの状況であり、このトレンチ内ではそれより上の部分の傾斜と同様の30度前後の傾斜となっている。

なお、第１・２トレンチともに地山は灰色の砂層であり、昭和61（1986）年に大和郡山市が境界に隣接する水路を改修した際におこなった立会調査の結果と一致している。また、地山の標高も59ｍ前後で一致しており、築造時における前方部前面の濠底の標高は59ｍ前後であったとみてよい。

遺物は、後世の盛土（Ⅲｃ）や濠内堆積土（Ⅵ）から埴輪片などが出土している。

第３トレンチ（第９図、図版５）　前方部西側面に設けた長さ2.5ｍ×幅２ｍのトレンチで、前方部西隅角から後円部側へ約15ｍの所に位置する。土層の状況は、上から表土（Ⅰａ）、浚渫土（Ⅱ）、後世の盛土（Ⅲｃ）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。他のトレンチ同様に後世の改変をうけており、築造当初の状況を確認することはできなかった。後世の盛土であるⅢｃ層中に、柱穴にもみえるような不明遺構がみられるが（南壁断面図）、その性格については不明である。木の根あるいは砦として利用されていた際の柱穴である可能性もある。地山と墳丘盛土の境界は標高59.6ｍ付近で、このトレンチ内の地山は黄褐色の砂質土である。なお、墳丘盛土のたちあがりが不自然かつ急であることから、現状の墳裾付近は大きく削平されているものと思われる。

遺物は、後世の盛土（Ⅲｃ）から埴輪片などが出土している。

第４トレンチ（第10図、図版６）　前方部西側面に設けた長さ９ｍ×幅1.7ｍのトレンチで、前方部西隅角から後円部側へ約30ｍの所に位置する。当初は長さ10ｍ×幅２ｍで設定することを予定していたが、樹木による制約をうけたため規模を若干縮小した。第１段斜面の葺石や第１段テラス（埴輪列含む）が検出されることを想定していたが、大きな改変をうけていずれも失われていることがわかった。

土層の状況は、上から表土（Ⅰａ）、後世の盛土（Ⅲｃ、Ⅲｄ）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。前方部前面に近い側でみられた浚渫土（Ⅱ）はこれ以後のトレンチではみられなくなる。南壁断面図からは全体にわたって後世の改変をうけていることがわかるが、第３トレンチと同様に現状の墳裾付近が特に大きく削平されているものと思われる。このトレンチ内における地山は黄青灰色の粘土で、地山の最高値は標高59.8ｍである。なお、最も墳裾側の墳丘盛土（Ⅴ）は地山の直上から粘質土、砂質土、粘質土、砂質土という具合に四層分が粘質土と砂質土を交互に積み重ねている点が特徴的である。

遺物は、後世の盛土（Ⅲｃ、Ⅲｄ）から埴輪片や近世の陶磁器片が出土している。　（加藤）

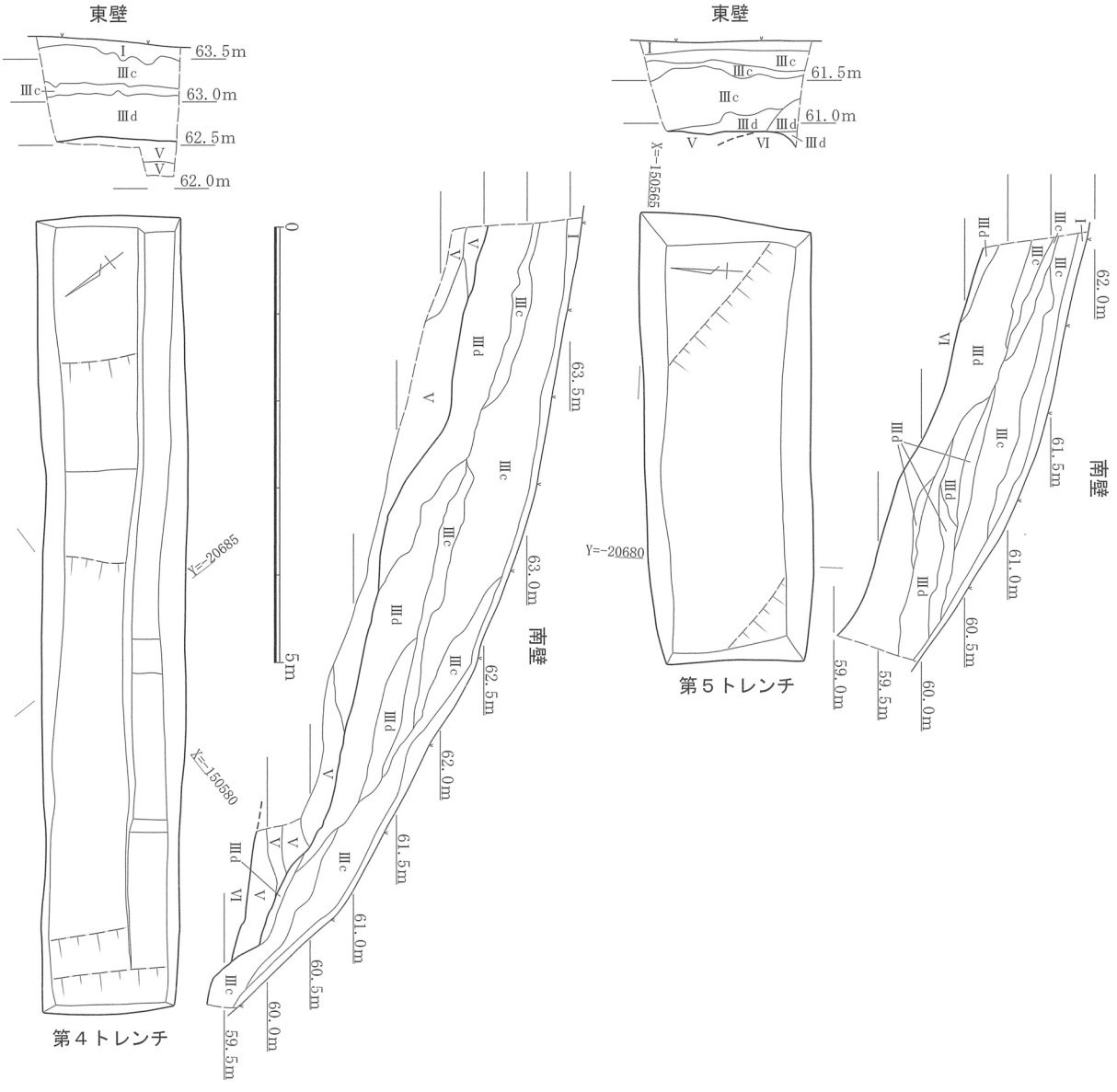
（２）造出・くびれ部（第５～７トレンチ）

第５トレンチ（第10図、図版６）　前方部西側面と西側造出との屈曲部分に設けたトレンチで、長さ５ｍ×幅２ｍである。土層の状況は、上から表土（Ⅰａ）、後世の盛土（Ⅲｃ、Ⅲｄ）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。他のトレンチ同様に後世の改変をうけており、築造当初の状況を確認することはでき

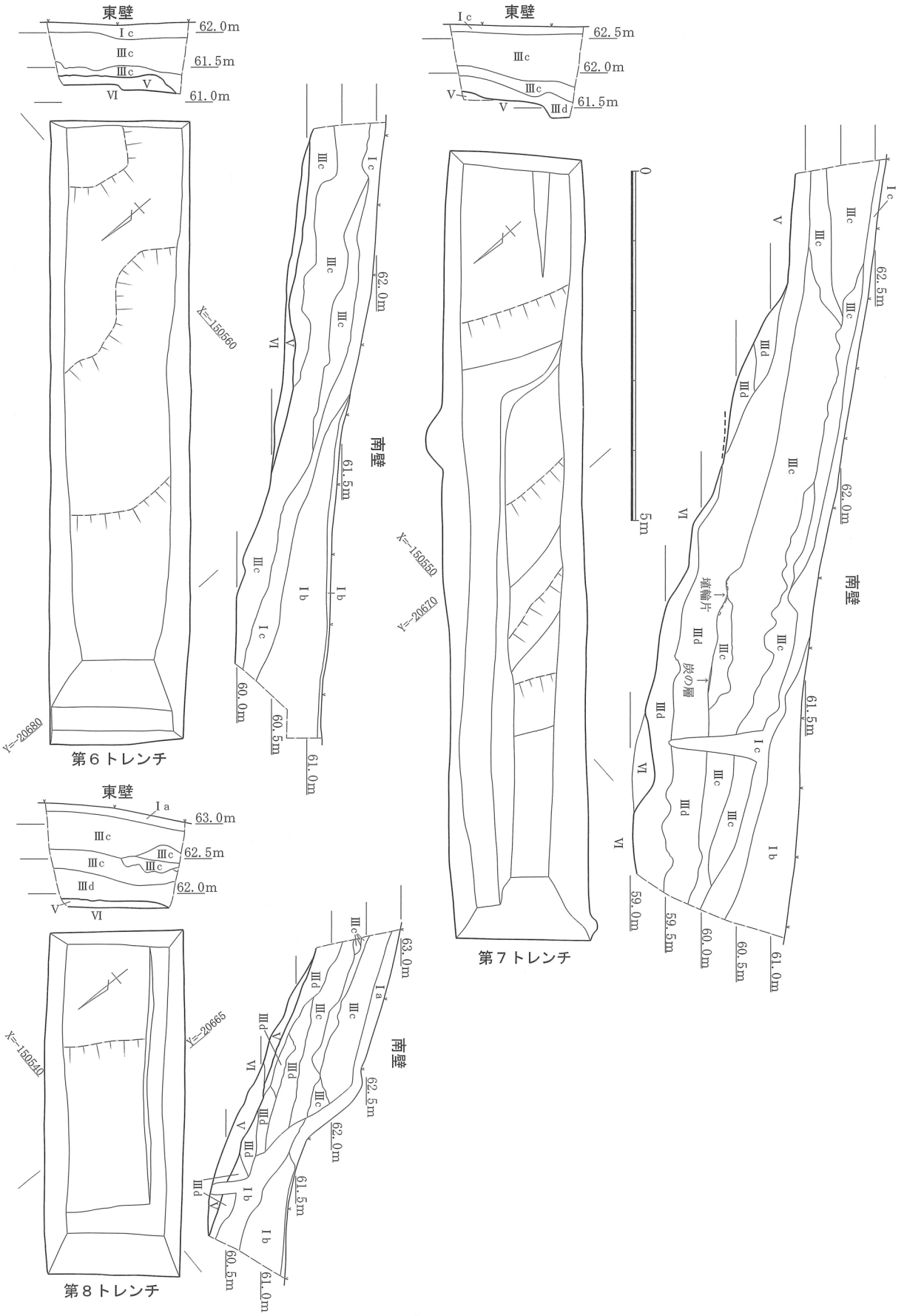
なかった。なお、墳丘盛土（Ⅴ）については東壁断面付近でわずかに確認できるのみである。後世の盛土（Ⅲｄ）内には炭が多量に混じった部分があり、ここから寛永通宝が出土している（第19図77・78）。明器が伴わないことから近世墓と断定はできないが、当参考地の南側に所在する萬福寺の墓地は近世段階から形成されているようであり、当参考地の墳丘上に近世墓が存在していたとしても不思議はない。このトレンチ内における地山は黄褐色の砂層、礫層、粘質土層で、地山の最高値は標高60.7ｍである。なお、このトレンチにおける墳丘構造に関する所見は、造出の斜面がすでに削平されている状況を確認するのみであった。

遺物は、後世の盛土（Ⅲｃ、Ⅲｄ）から埴輪片、近世の陶磁器片、寛永通宝などが出土している。

第６トレンチ（第11図、図版７）　西側造出の上面に設けたトレンチで、長さ９ｍ×幅２ｍである。当初は長さを10ｍに設定する予定であったが、樹木による制約をうけたため９ｍに変更した。土層の状況は、上から表土（Ⅰａ）、現代の盛土（Ⅰｂ）、旧表土（Ⅰｃ）、後世の盛土（Ⅲｃ）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。他のトレンチ同様に後世の改変をうけており、築造当初の状況を確認することはできなかった。このトレンチでは造出の上面や斜面が検出されることを想定していたが、そうした点については不明といわざるをえない。ただし、地山（Ⅵ）の直上にわずかに墳丘盛土（Ⅴ）が残存している箇所がある



第10図　郡山陵墓参考地　第４、５トレンチ平面図・断面図（1/80）



第11図　郡山陵墓参考地　第６、７、８トレンチ平面図・断面図（1/80）

ことから、造出上面は地山を水平に削平することで造成していたというよりは、西に向かって緩やかに落ちていく自然地形上（地山上）に墳丘盛土をほどこすことによって造出を成形していたことがわかる。なお、このトレンチ内における地山は明褐色のシルトで、地山の最高値は標高61.2ｍである。

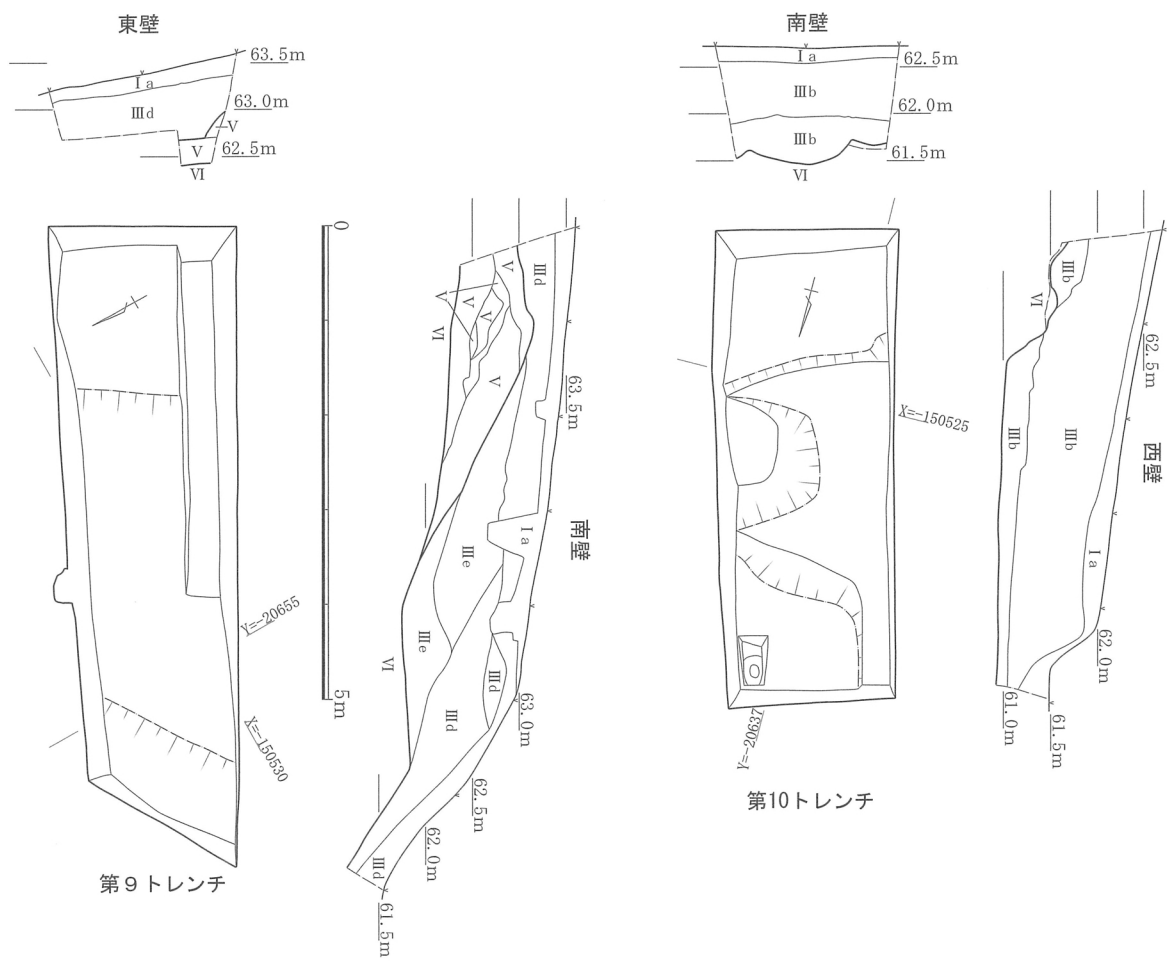
遺物は、後世の盛土（Ⅲｃ）から埴輪片、笊形土器片などが出土している。なお、笊形土器はトレンチ内の最も東寄りの部分から出土した。墳丘自体は築造当初の状況をとどめていないとはいえ、このトレンチ周辺が造出であることを示す遺物であるといえる。（加藤）

第７トレンチ（第11図、図版７、８） 西側造出と後円部の境、西側くびれ部上面を想定し設けたトレンチで、長さ11ｍ×幅２ｍである。当初は長さを10ｍに設定する予定であったが、くびれ部を確認するため、墳丘側に１ｍ拡張した。土層の状況は、上から現代の盛土（Ⅰｂ）、旧表土（Ⅰｃ）、後世の盛土（Ⅲｃ）、後世の盛土（Ⅲｄ）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。他のトレンチ同様に後世の改変をうけており、築造当初の状況を確認することはできなかった。ただし、墳丘盛土と地山が西に下降傾斜していることから、ここは、本来後円部の西側斜面と考えられ、西側くびれ部は第７トレンチよりやや南と想定可能である。

後世の盛土（Ⅲｄ）の上面には、埴輪片と薄く炭が堆積していたが、第５トレンチで出土した寛永通宝の存在から、この炭は近世墓に関係するものの可能性がある。

なお、このトレンチ内における地山は明黄色のシルトと粗砂の互層のため、粒径の違いが顕著である。地山の最高値は標高60.3ｍである。

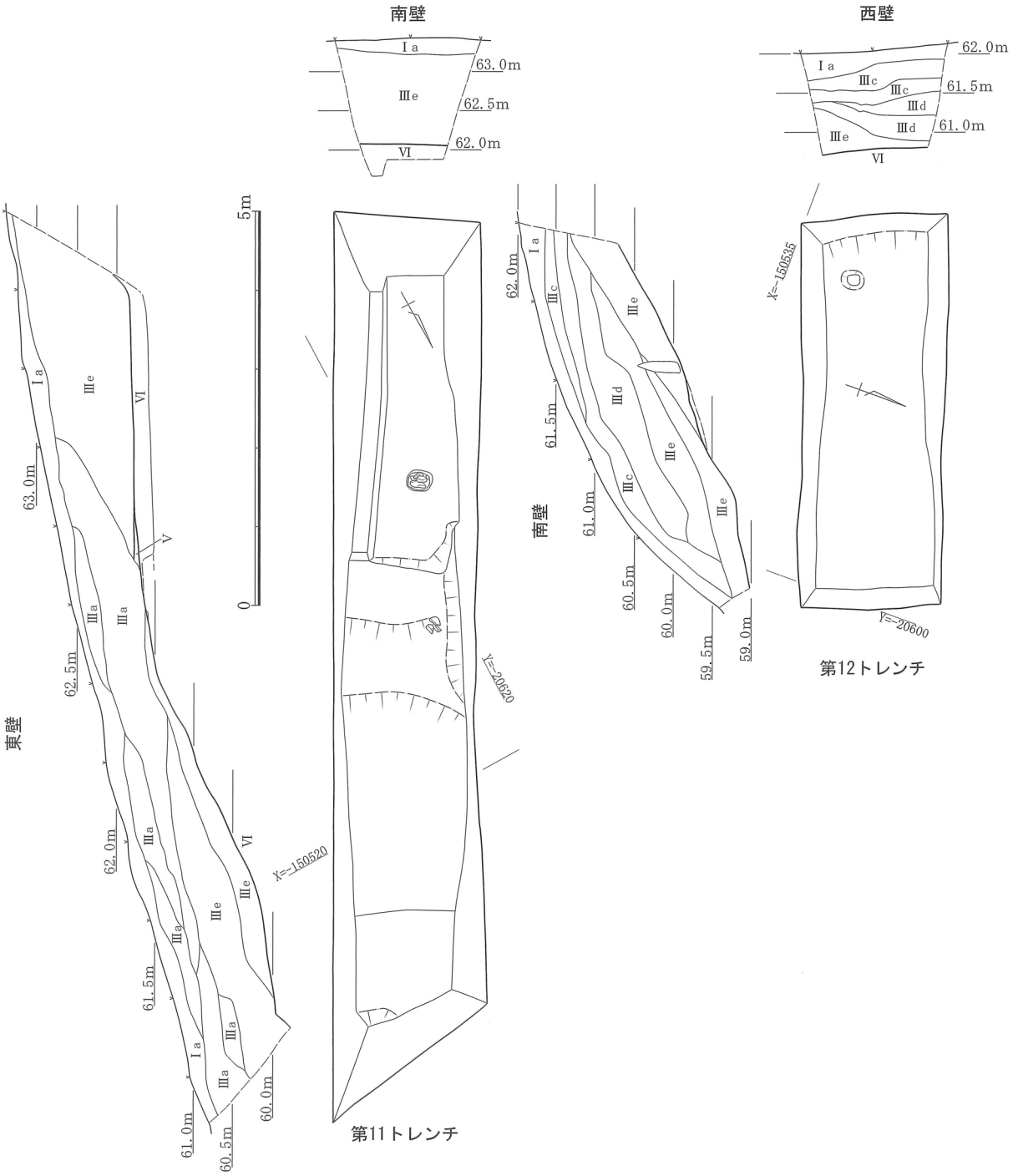
遺物は、後世の盛土（Ⅲｃ）から埴輪片、近世のすり鉢片、後世の盛土（Ⅲｄ）から埴輪片と瓦質土器片などが出土している。（横田真吾）



第12図　郡山陵墓参考地　第９、10トレンチ平面図・断面図（1/80）

（３）後円部（第８～12トレンチ）

第８トレンチ（第11図、図版９） 西側くびれ部から後円部へ移行したあたりに存在する大きな段差が含まれるように設けたトレンチで、長さ５ｍ×幅２ｍである。土層の状況は、上から表土（Ⅰａ）、現代の盛土（Ⅰｂ）、後世の盛土（Ⅲｃ、Ⅲｄ）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。他のトレンチ同様に後世の改変をうけており、築造当初の状況を確認することはできなかった。なお、墳丘盛土（Ⅴ）については、地山の風化土である可能性もある。



第13図　郡山陵墓参考地　第11、12トレンチ平面図・断面図（1/80）

調査前から認識されていた東西間における大きな段差については、県道整備時以前に形成されたと考えられる旧表土（Ⅰc）が現代の盛土（Ⅰb）の下に残存しないことから判断して、県道整備時の削平で形成されたものと思われる。なお、このトレンチ内における地山は明褐色のシルトで、地山の最高値は標高61.8mである。

遺物は、後世の盛土（Ⅲc、Ⅲd）から埴輪片などが出土している。

第9トレンチ（第12図、図版9） 図上において、墳丘主軸に対して直交し、かつ後円部の中心をとおる線上の後円部西側に設けたトレンチで、長さ7m×幅2mである。当初は長さを10mに設定する予定であったが、7mに変更した。土層の状況は、上から表土（Ⅰa）、現代の盛土（Ⅰb）、後世の盛土（Ⅲd、Ⅲe）、墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。地山は削平をうけている境界際を除いてそれほど高さの変化がなく、墳丘側において墳丘盛土の立ち上がりが確認できる。この墳丘盛土については、築造当初の面を残しているわけではないものの墳丘第2段斜面をある程度は反映したもので、平坦な地山の面は第1段テラスを反映したものである可能性が考えられる。なお、このトレンチ内における地山は明褐色のシルトで、地山の最高値は標高62.4mである。

遺物は、主に後世の盛土（Ⅲe）から埴輪片などが出土している。

第10トレンチ（第12図、図版10） 第9トレンチから北側へ45度振った位置に設けたトレンチで、長さ5m×幅2mである。土層の状況は、上から表土（Ⅰa）、後世の盛土（Ⅲb）、地山（Ⅵ）の順に堆積しているのみである。このトレンチにおける後世の盛土（Ⅲb）は他のトレンチにはみられないもので、南壁から1.5mほどの地点から北側の地山を水平に削平した後に一気に造成されたようである。その時期についてはこの層に含まれる遺物から近世以降ということはわかるが、それ以上のことは不明である。ただし、先にも述べたが、これについては明治26（1893）年に刊行された野淵龍潜による『大和国古墳墓取調書』における「維新ノ後奈良街道改修ノ時北ノ一部ヲ切平均シ道敷トナセリ」という記述との対応関係が注意される。なお、トレンチの北東角において検出された遺構の性格については不明であるが、埋土中に現代に近い遺物などが含まれていたことから、柵や電柱などの痕跡である可能性が高い。

遺物は、表土（Ⅰa）、後世の盛土（Ⅲb）から埴輪片、陶器片が少量出土している。（加藤）

第11トレンチ（第13図、図版10、11） 墳丘主軸上の後円部前面中央に設けたトレンチで、長さ11.5m×幅2mである。当初は長さ10mとしていたが、墳端確認のため、境界際近くまで北へ1.5m拡張した。第1段斜面の葺石、第1段テラス（埴輪列含む）などが検出されることを想定していたが、全て失われていることがわかった。墳端については、トレンチ北端でまだ北へ下降傾斜することから、境界外の可能性も考えられる。土層の状況は、墳丘側では表土（Ⅰa）、後世の盛土（Ⅲa）、後世の盛土（Ⅲe）, 墳丘盛土（Ⅴ）、地山（Ⅵ）と上から順に堆積している。この内、墳丘盛土については、非常に薄くしか残っておらず、流土等の可能性も捨て切れないが、出土遺物も確認できないため、ここでは墳丘盛土が一部残存したものと考える。トレンチの中央付近より、北へ下降傾斜しているため、トレンチ南半の平坦面が第1段テラスのようにも見えるが、これは墳丘築造時の形状をとどめたものではない。また、平坦面と緩傾斜面の集石は、帰属年代不明であるものの、建物の根石であった可能性がある。

遺物は、後世の盛土（Ⅲa）から埴輪片や近世・近代の陶磁器片が出土している。

第12トレンチ（第13図、図版11） 第11トレンチから東側へ45度振った位置に設けたトレンチで、長さ5m×幅2mである。土層の状況は、上から表土（Ⅰa）、後世の盛土（Ⅲc）、後世の盛土（Ⅲd）、後世の盛土（Ⅲe）、地山（Ⅵ）の順に堆積している。位置的には、本来後円部の東端付近であるが、緩やかに東へ地山が下降傾斜するのみで、遺構は全く残っていなかった。

遺物は、後世の盛土（Ⅲe）から埴輪片、近世の瓦片が少量出土している。（横田）

3　出土遺物

今回の事前調査で出土した遺物の総数は破片数で約3,000点、コンテナで7箱である。調査面積などの違いもあるので一概に比較はできないが、他の陵墓における事前調査に比べると遺物の出土量は少ない印象がある。出土遺物の約8割が埴輪片で、古墳時代遺物はその他に笊形土器などがごく少量出土している。埴輪片以外の約2割については、その大半が中近世の陶磁器・土師器である。以下では、これらの出土遺物について説明する。なお、図示した各遺物の番号脇の括弧内に記した数字は、各資料が出土したトレンチの番号である。

（1）埴輪（第14～18図、図版12）

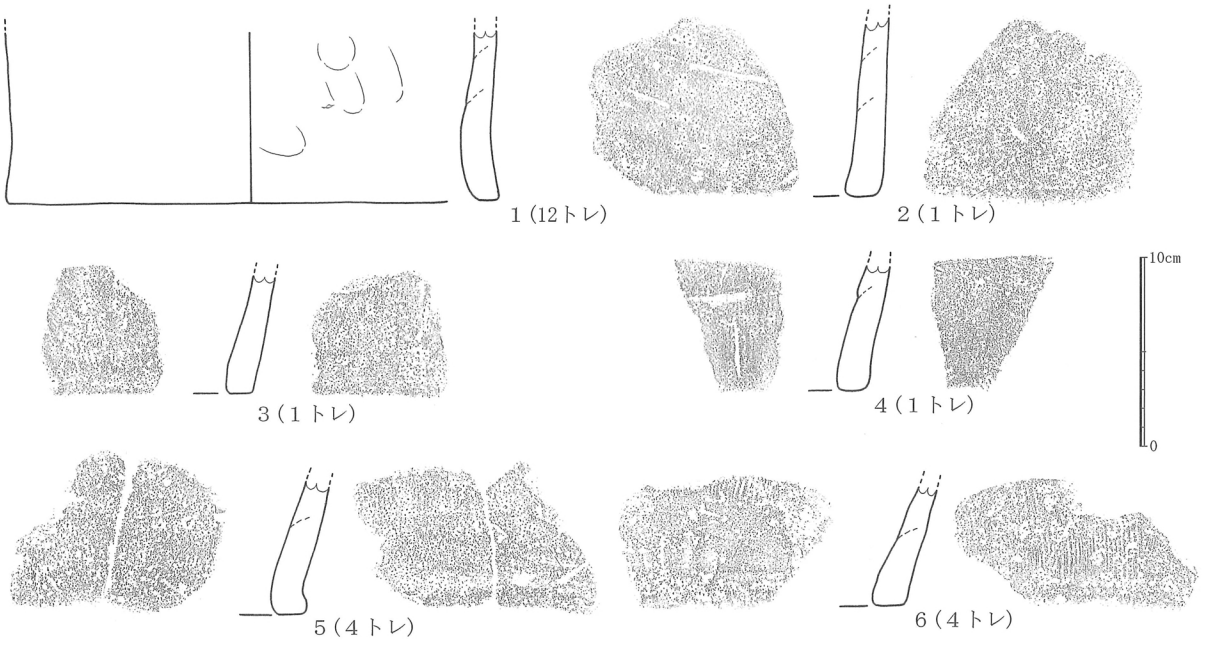
今回の調査で出土した埴輪の大半は円筒埴輪や朝顔形埴輪といった円筒埴輪列を構成する埴輪であるが、その他にも家形埴輪、囲形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪などを確認できる。

埴輪の焼成については、堅緻な仕上がりのものがみられず、黒斑をもつ資料がみられることからすべて野焼きによるもの判断される。色調は、黄橙色～黄白色となるものが大半である。胎土には基本的に直径3㎜以内の砂粒（花崗岩片、チャート、金雲母、赤色粒など）が含まれ、非常に多く含むものやあまり目立たないものもみられるが、破片資料が大半であるためその多寡が形状の差異などと関連するのかは不明である。なお、今回の調査で出土した埴輪の特色として、小破片ばかりであるとともに、器壁が摩滅していて調整などがあまり観察できない点をあげることができる。

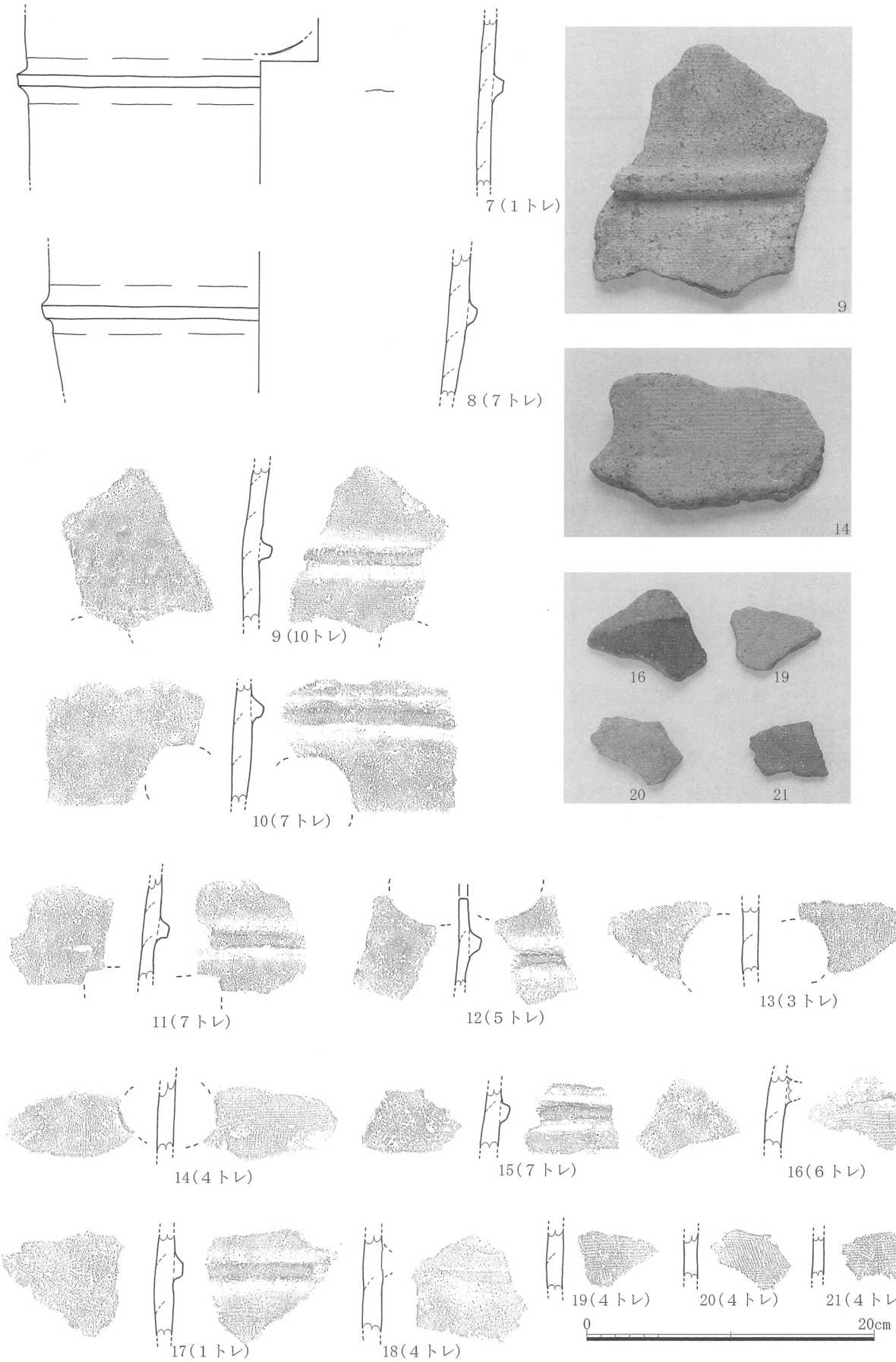
円筒埴輪・朝顔形埴輪　これまでにも述べたように、今回の調査で出土した埴輪は破片ばかりであり、全形のわかる資料はもとより、第1段高や突帯間隔のわかる資料も存在しない。突帯間隔のわかる資料が存在しないことから、外面調整でほどこされたB種ヨコハケについてもそれ以上の細分は不可能な状況である。ただし、見た目の印象ではおそらく大半はBb種ヨコハケではないかと思われる。

以下では、おおまかであるが実測した資料についてふれていきたい。なお、実測図は1/4で掲載している。

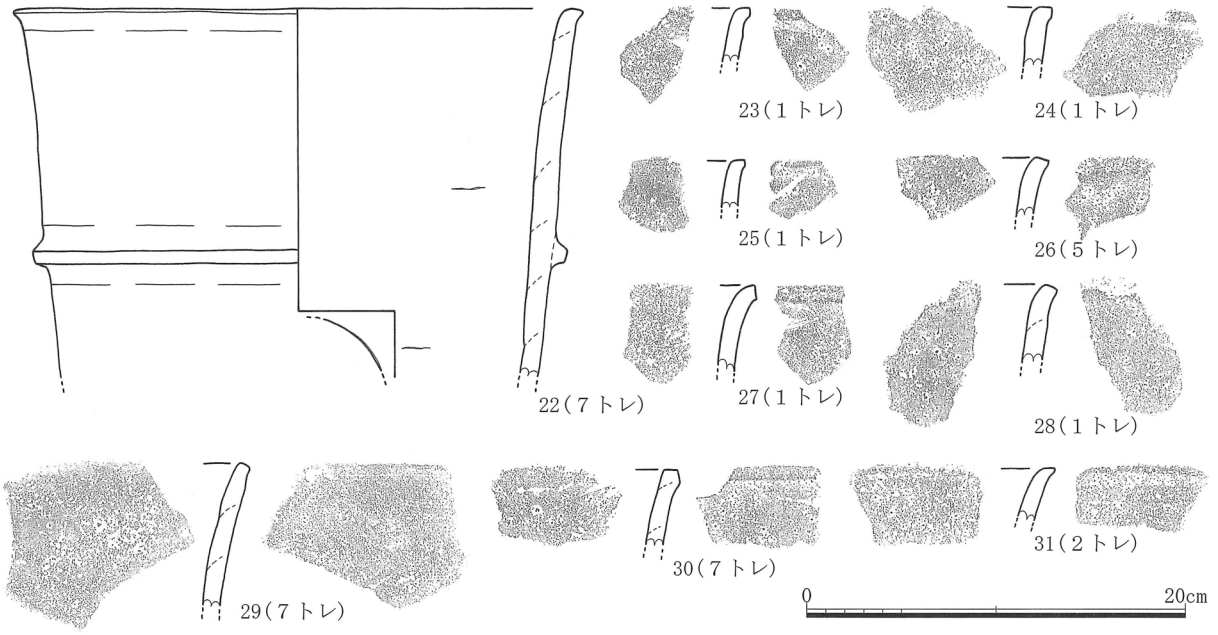
1～6は底部を含む破片である。1は底径が25.6㎝に復元できる。内外面は摩滅しており、内面にはわずかにナデがみられる。2は内面の拓本に接合痕のような痕跡がみえるが、これはガジリ痕である。4の内面における縦方向の痕跡も同様である。5・6については、その傾きから考えて円筒埴輪や朝顔形埴輪ではなく壺形埴輪の底部となる可能性もある。



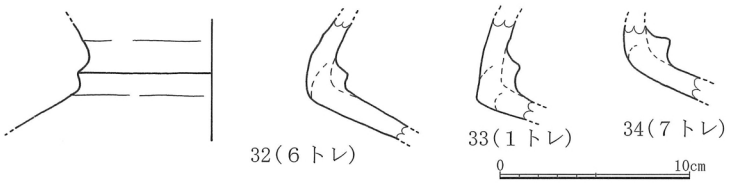
第14図　郡山陵墓参考地　出土品実測図（1）　円筒埴輪・朝顔形埴輪　底部（1/4）



第15図　郡山陵墓参考地　出土品実測図（２）　円筒埴輪・朝顔形埴輪　胴部（1/4）



第16図　郡山陵墓参考地　出土品実測図（３）　円筒埴輪　口縁部（1/4）



第17図　郡山陵墓参考地　出土品実測図（４）　朝顔形埴輪・壺形埴輪（1/4）

７～21は胴部の破片である。透孔を含むものを半数ほど図示しているが、透孔の形状はそのほとんどが円形であると思われる。唯一、11が方形もしくは半円形の透孔となる。外面調整は縦方向の静止痕をともなうＢ種ヨコハケのみられる個体もあるが、突帯間が完存している資料がないのでＢｂ種であるのかＢｃ種であるのかは不明である。ただし、野焼きであることを考えれば、Ｂｂ種とみるのが素直であろう。７は胴部の直径が32.5㎝に復元できる。器壁は内外面ともに摩滅している。８は胴部の直径が29㎝に復元できる。器壁は内外面ともに摩滅しているが、内面の一部でわずかにハケメが観察できる。９は外面調整が比較的良好に観察できるが、ヨコハケに静止痕があるのかどうかは判然としない。10～12はいずれも透孔が穿たれており、器壁は内外面ともに摩滅している。13・14は外面調整としてタテハケの後にヨコハケがほどこされているが、ヨコハケの静止痕については不明である。15～17・19は外面調整のヨコハケが観察できる。静止痕については不明である。18は突帯の剥離箇所において、突帯の設定にともなうと考えられる凹線が観察できる。20・21では外面調整のヨコハケに静止痕が確認できる。

22～31は口縁部を含む破片である。口縁部の形状は、ほぼ直立し端部をわずかに外反させたものが多いが、端部を外反させずにナデをほどこしただけのものも一定量みられる。22は口縁部高のわかる唯一の資料で13㎝であり、口径は約30㎝に復元できる。25は外面の拓本に線刻のようなものがみえるが、これはガジリ痕である。

32～34は朝顔形埴輪もしくは壺形埴輪の頸部付近の破片である。いずれも頸部に突帯をもつことが特徴である。

形象埴輪　今回の調査で確認した形象埴輪としては、家形埴輪、囲形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪がある。

35・36は切妻造もしくは入母屋造の家形埴輪の屋根部分の破片である。35には網代の表現がほどこされている。37は三角形の突起表現が特徴的な囲形埴輪の破片である。38・39は家形埴輪もしくは囲形埴輪の突帯である。

40～42は蓋形埴輪の破片である。40は立飾部の破片である。41は笠部の破片で段差がみられるが、これは区画表現の一周する突帯のものであろう。42は蓋形埴輪の可能性がある破片であるが、確証はない。

43は盾形埴輪の破片である。上部にみられる綾杉紋は内区と外区を区画するもので、内区には半円状の表現がみられる。44は盾形埴輪の内区部分の破片である可能性がある。

45～47の器種は不明である。45は平面図における円形の剥離痕が特徴で、その両側が生きている。また、断面図ではそれらの生きた面を形成する粘土帯に対して斜めに粘土が補充されている。46は家形埴輪などの突帯状であるが、平面図の上方に位置する面も生きている。47は何に付属するのかはわからないが、鰭飾りになると思われる。（加藤）

（2）笊形土器・土製品（第19図、図版13）

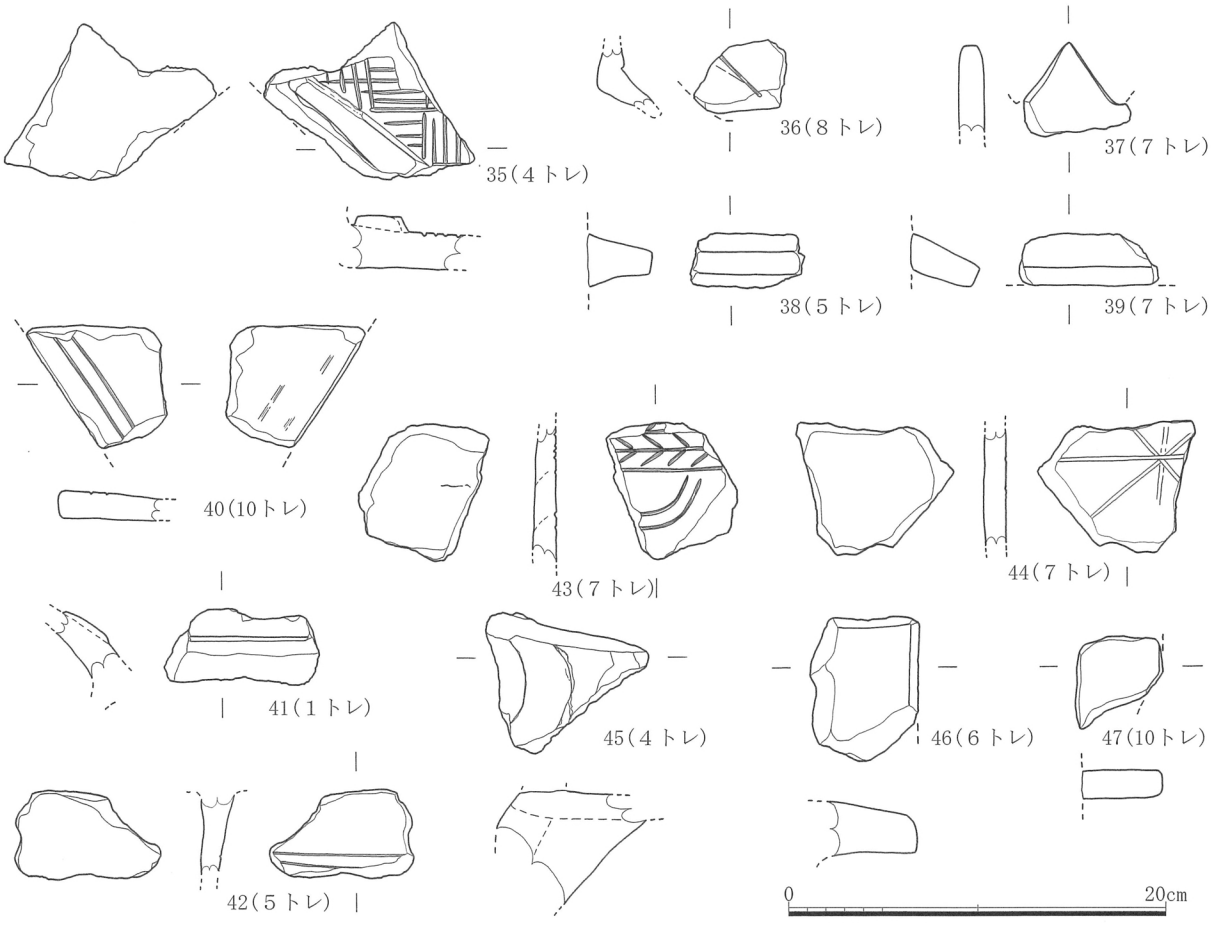
土器・土製品について、順に述べる。48は、第6トレンチより出土の笊形土器である。内外面に圧痕が残るが、摩滅のためか消えかけている。49は、第6トレンチより出土の棒状土製品である。やや扁平な円柱形で、端部は丸味を帯びる。

（3）その他の遺物（第19図、図版13）

須恵器・土師器・陶器・磁器・瓦質土器・瓦および銅銭について、順に述べる。

50は第7トレンチ出土の須恵器片で、器種は壺か甕の可能性がある。内面にオサエによる青海波文、外面にタタキおよびカキメの痕跡が残る。51は第4トレンチ出土の須恵器壺で、内面にロクロナデ、外面にナデを施す。52は第7トレンチ出土の須恵器壺で、内面にオサエによる青海波文、外面にナデの痕跡が残る。53は第4トレンチ出土の須恵器長頸壺で、内外面にロクロナデを施す。

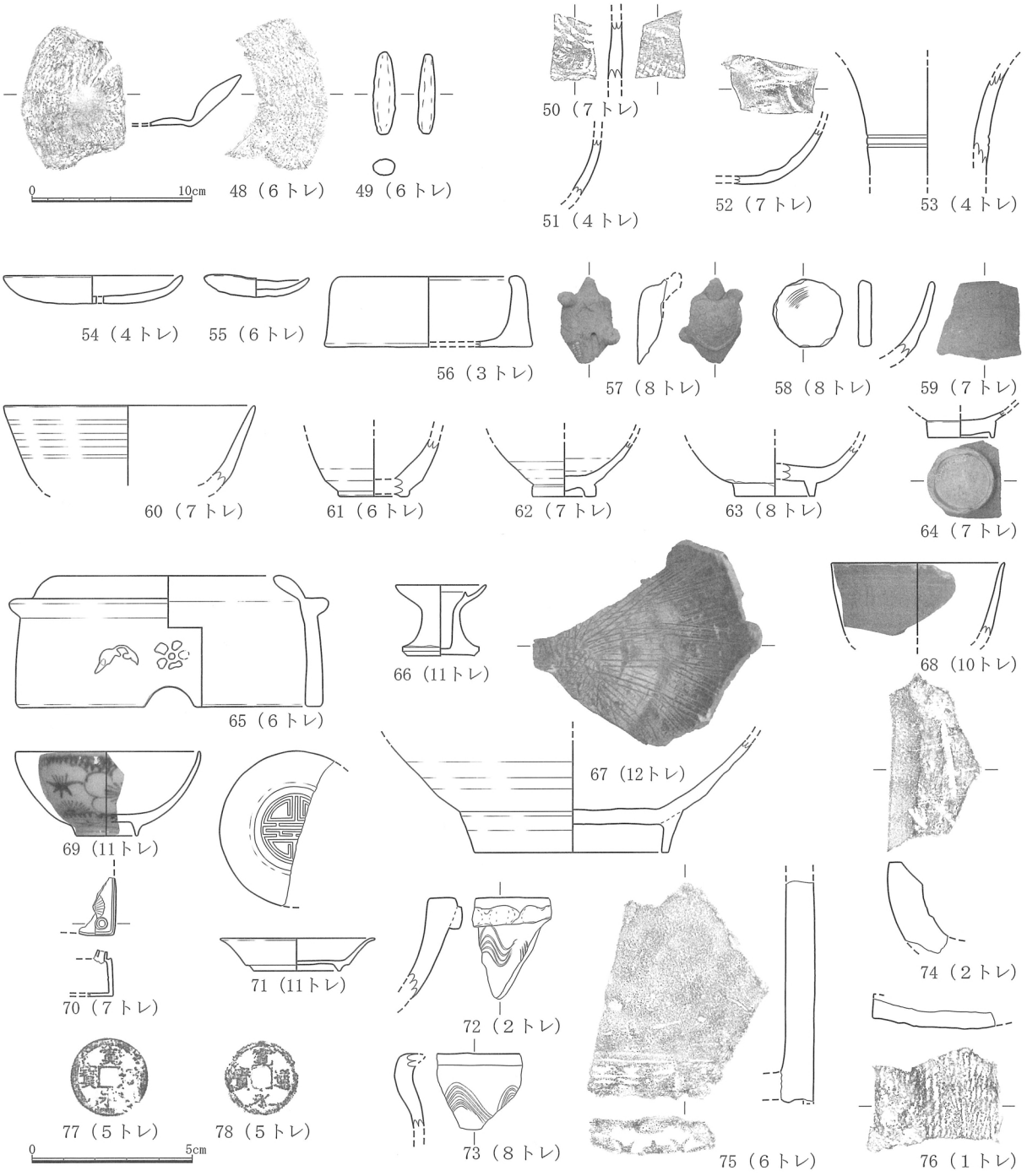
54は第4トレンチ出土の土師質皿で、内外面にナデを施す。ほぼ中央部分に燭台に刺すための孔がある。



第18図　郡山陵墓参考地　出土品実測図（5）　形象埴輪（1/4）

55は第６トレンチ出土の土師質皿で、内外面にナデを施す。ほぼ完形である。56は第３トレンチ出土の土師質火入れである。煙管による喫煙に伴うものである。57は第８トレンチ出土の土製人形である。亀を象ったもので、腹側に何かを刺した穴がある。

58は第８トレンチ出土の陶器転用円盤である。回転糸切り痕跡がある陶器底部の外周を打ち欠いて丸く仕上げている。遊具として使われたものの可能性がある。59は第７トレンチ出土の陶器碗である。内面から外面上部にかけてはロクロナデ後に施釉し、外面下部はロクロケズリ後に施釉してある。60は第７トレンチ出土の陶器碗である。内面から外面中部まで施釉してあるが、外面下部は露胎である。61は第６トレンチ出土の陶器碗である。内面および外面中部まで施釉してあるが、外面下部は露胎で、ロクロケズリの痕



第19図　郡山陵墓参考地　出土品実測図（６）　土器・陶磁器・瓦（1/4），銅銭（1/2）

跡が残る。底部はわずかに高台があるが、これは糸切りによって平坦になった底部の内側を削り出して作ったものである。62は第7トレンチ出土の陶器碗である。内面および外面中部まで施釉してあるが、外面下部は露胎で、ロクロケズリの痕跡が残る。高台は削り出しである。63は第8トレンチ出土の陶器碗である。内面および外面下部まで施釉してあるが、高台は露胎で、削り出しである。64は第7トレンチ出土の陶器碗である。内面を施釉してあるが、外面下部は露胎で、ロクロケズリの痕跡が残る。高台は削り出しである。65は第6トレンチ出土の陶器風炉である。内外面に緑釉を施す。内面は熱の影響か釉が薄くなっている。外面には印刻により花等を象っている。66は第11トレンチ出土の陶器灯火具である。内面から外面にかけて釉を施すが、底部は露胎で、ロクロケズリの痕跡が残る。67は第12トレンチ出土の陶器擂鉢である。高台の形状や擂目から備前産の可能性がある。

68は第10トレンチ出土の青磁碗である。口縁端部の釉が禿げている。69は第11トレンチ出土の磁器碗である。コバルトによる染付が施されている。高台底部のみ露胎である。70は第7トレンチ出土の磁器水滴である。菊の陽刻があり、一部に呉須の染付が残る。71は第11トレンチ出土の磁器皿である。型作りで、内外面に透明釉を施している。高台底部のみ露胎である。

72は第2トレンチ出土の瓦質土器である。外面に突帯を付し、波状文を施す。73は第8トレンチ出土の瓦質土器である。外面に波状文を施す。

74は第2トレンチ出土の丸瓦である。内面に布目と綴紐の痕跡が残る。75は第6トレンチ出土の軒平瓦である。凸面端部に、瓦当部粘土貼り付け用の刻み目が残る。76は第1トレンチ出土の平瓦である。凸面に、縄タタキの痕跡が残る。

77と78は第5トレンチ出土の寛永通宝である。いわゆる「古寛永」である。（横田）

4　調査の所見

（1）築造時の墳丘について

各トレンチの記載においても述べたように今回の調査の結果、墳丘築造当時の遺構はほとんど残存していないことが明らかになった。しかし、墳丘築造当時のものと考えられる遺構もわずかながら確認されている。ここではそれらについての所見を示しておきたい。

葺石　注目されるのは、第1・2トレンチにおいて確認されている石材である。これらについては、地山上面に墳丘盛土がほどこされはじめる境界部分にみられる比較的大きなものが基底石とも考えられる点や、墳丘盛土の斜面にも石材が一部に残存しており本来は斜面に葺石がほどこされていたとも考えられる点を総合し積極的に評価すれば、これらは葺石がかろうじて残存したものと判断され、前方部前面の墳裾を確認することができたと評価することができる。

第1段テラス　確実に第1段テラスと判断できる面や埴輪列は残存していないが、第9・11トレンチにおける地山の平坦面は第1段テラスをある程度は反映している可能性がある。ちなみにその標高は62m前後と考えられ、第1トレンチの解説において推測した第1段テラスの標高62.4mとの差は40㎝前後であり、第1段テラスはおおよそ水平に築造することが志向されていたものと推測される。

地山　参考までに各トレンチにおいて検出された地山の標高の最高値を示しておく（第1表）。これによれば前方部側の数値が低く、後円部側が高い傾向を読みとることができる。これについては西の京丘陵最南端に位置するという南へ向かって下っていく自然地形を反映したものといえる。墳丘築造にあたってはこうした自然地形を利用したものと推測され、後円部周辺では墳丘第1段以下を地山の削り出しで成形し、前方部の前面では墳丘すべてを地山の直上に盛土をおこなうことで成形していた状況を確認できる。

（2）墳丘の改変状況

上でも述べたように今回の調査の結果、墳丘築造当時の遺構はほとんど残存しておらず、改変をうけている状況が明らかになった。以下ではその改変の状況についてまとめておきたい。

葺石　第1・2トレンチにおける礫の残存状況を積極的に評価すれば、墳丘第1段斜面については葺石が

ほどこされており、その葺石を損なうことを目的としたような改変が加えられたと解釈できる。また、当参考地では墳丘表面や後世の盛土中にもほとんど礫がみられないのが特徴である。そのような状況と照らしあわせた時に興味深いのが豊臣秀長による郡山城の整備である。豊臣秀長は城郭の整備のために石材を社寺などの各所から集めたことが知られており、例えば『多聞院日記』中に天正16（1588）年1月、奈良の町民たちに家並20荷の五郎太郎石の供出を命じた記述がみられる(13)。五郎太郎石とは建築用語でいうところの五郎太石と同義と考えられ、そのように考えると葺石にもちいられるような礫は最適の大きさといえる。このような記述に今回の調査状況が対応するかどうか確証はないが、葺石が損なわれた要因を郡山城の整備にもとめることも可能ではある。ただし、そうした場合、葺石を抜き取った後に旧表土層が形成されずに後世の盛土がほどこされている状況を説明できない点で問題が残る。結局のところ、葺石が損なわれた理由については不明としかいいようがないのが現状である。

前方部西側面　前方部西側面においては、測量図からも明らかなように現状の墳裾部分が削平されて崖に近い形状となっている。これについては調査の結果、裾部分が地山まで大きく削平されていることが確認できた。周濠を埋め立てて陸地化した際に、耕作面積を広げることと土の確保を目的としておこなわれた可能性があるが、詳細な時期については不明である。

後円部　各トレンチで状況が異なるが、ここでは第10トレンチの状況と後世の盛土（Ⅲｅ）の評価について触れておきたい。

まず、第10トレンチの状況については、時期は不明であるが地山を50㎝ほど掘り込んで削平している点とその後に2ｍ近く一気に盛土（Ⅲｂ）がほどこされている点が他のトレンチではみられない状況である。このうちの削平されている状況については、野淵龍潜の『大和国古墳墓取調書』における「維新ノ後奈良街道改修ノ時北ノ一部ヲ切平均シ道敷トナセリ」という記述に対応する可能性も考えられるが、確証はない。また、削平された地山面には硬化するなど街道として使用されていたような痕跡がみとめられない点も不可解である。ただし、その後にさらに削平されて一気に盛土がほどこされたとすれば理解可能ではあるが、あくまで推論の域をでない。

次に後世の盛土（Ⅲｅ）について触れておく。Ⅲｅ層は後円部に設けた第9・11・12トレンチにおいて確認されている砂利と砂からなる特徴的な土層である。この土層は、おそらく地山を削りだしてほどこされた比較的内部の墳丘盛土に由来するものと思われる。この土層はおおまかな分類で後世の盛土としたⅢ層の中でも最初に形成されたものであり、第11トレンチの南側では1ｍ以上も一気に造成されていることから、Ⅲｅ層の形成時には大がかりな改変が後円部を中心に加えられたことがわかる。ただし、その時期については埴輪片を少量含むものの葺石などはまったく含まれず、中近世遺物も含まれないことから不明としかいいようがない。第12トレンチにおいてはこのⅢｅ層の上にⅢｃ・Ⅲｄ層が堆積しており、その先後関係を知る手がかりとなるが、Ⅲｃ・Ⅲｄ層にはどちらも近世遺物が含まれることが確認されており、この両者については明瞭な時期差はみとめられない。ただし、この両者とⅢｅ層の間に時期差があるかどうかは不明である。旧表土層の形成がみられないことから時期差がないことも考えられるが、削平をおこなってから造成されている可能性もある。このことから、今回の調査において一般的にみられる後世の盛土（Ⅲｃ～ｅ）の評価については、三者が同時期に形成されたかⅢｅ層のみ先行して形成された可能性があることを指摘しておきたい。

（加藤）

第1表　各トレンチにおける地山の標高の最高値

トレンチ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
地山高（m）	59.0	59.2	59.6	59.8	60.7	61.2	60.3	61.8	62.4	61.7	62.1	60.8

まとめ

調査成果　今回の調査は、結果的に外構柵設置箇所が主体となったため墳丘西側を中心とした範囲において実施することとなった。調査の所見としては、第１・２トレンチにおいて葺石の一部を検出し、前方部前面の墳裾を確定することができた。また、第１段テラスは後円部周辺では標高 62 m付近、前方部前面では 62.4 m付近に位置することが推測される。ただし、その他に築造当初の状況をうかがう手がかりは乏しく、大きな改変をうけていることが指摘できる。その改変の実態については、確定するには手がかりが不足しているものの、豊臣秀長による郡山城の整備に伴う葺石の抜き取りや明治維新後の奈良街道の整備による削平などをその可能性として指摘しうる。後世の盛土としたⅢｃ～ｅ層の評価次第ではあるが、当参考地の墳丘には複数回にわたって改変の手が加えられていると考えるのが、Ⅲｃ～ｅ層の土質の差異からみても妥当ではないかと判断しておきたい。ただし、それが文献史料に合致するかどうかの判断は保留しておく。

出土遺物はその約８割が埴輪片であるが、全形のわかる資料はない。ただし、有黒斑でＢ種ヨコハケがほどこされていることから、川西宏幸氏の編年案(14)でいうところのⅢ期に相当することは明らかである。したがって、当参考地の築造時期についてはこれまで考えられていた多くの意見(15)よりもだいぶさかのぼることが判明した。また、造出上面に設けた第６トレンチからは囲形埴輪、笊形土器などが出土しており、当該箇所での祭祀を考える上で参考になる。

工法　整備工事の工法については現在検討中であるが、基本的には墳丘盛土などの古墳築造に伴う面を保護する形でおこなうことを予定している。最終的な工法については、工事施工時の立会調査の結果とともに再来年度刊行される本誌第 66 号において報告したい。　（加藤・横田）

註

（１）　ここで取り上げた古墳のデータなどについては、基本的に以下の文献に拠った。
森下惠介「奈良盆地北部の古墳」『大和の古墳Ⅰ』新近畿日本叢書 大和の考古学 第２巻、近畿日本鉄道株式会社、2003 年。

（２）　早稲田大学図書館所蔵本を参照した（請求記号：ル 04 04873）。

（３）　あるいは、前方後円墳の前方部と後円部を二つの墳丘（陵）と誤認した可能性もある。
なお、同書中には垂仁天皇陵および安康天皇陵を指した「菅原伏見陵二基」という記述をみいだすこともできる。

（４）　なお、柳沢文庫において当参考地に関する史料を探索したが、このほかに有益な情報をえることはできなかった（陵墓調査室の有馬室員が実施）。

（５）『諸陵寮回議冊 第一』（宮内公文書館所蔵、識別番号：41619）内の第 22 号。

（６）　秋山日出雄（編）『大和国古墳墓取調書』（財）由良大和古代文化研究協会、1985 年。

（７）　概報などが公表されているわけではないが、調査内容などについては大和郡山市教育委員会の服部伊久男氏より資料を提供していただいた。

（８）　このことについても、大和郡山市教育委員会の服部伊久男氏よりご教示いただいた。

（９）　今尾文昭・関川尚功・前園実知雄「大和」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社、1992 年など。

(10)　河上邦彦「大和」『全国古墳編年集成』雄山閣、1995 年など。

(11)　水利組合は当参考地の隣接地も管理しており、調査にあたっては調査用プレハブを設置する用地の提供などでご協力をいただいた。

(12)　調査は平成 24（2012）年 10 月 17 日～ 12 月２日にかけて実施した。調査中には陵墓管理委員に視察いただき、ご指導・ご教示賜った。また、石材については後掲のとおり奥田尚氏に調査いただいた。なお、調査にあたっては、大和郡山市教育委員会の服部伊久男氏、山川均氏、十文字健氏から多くのご教示をいただいた。

(13)　『増補續史料大成』第 41 巻（多聞院日記四）、臨川書店、1978 年、108・109 頁。

(14)　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２・４号、日本考古学会、1978・79 年。

(15)　註９に同じ。



1　第１トレンチ　全景（南から）



2　第１トレンチ　東壁（南から）



3　第１トレンチ　北壁（南から）



4　第１トレンチ　東壁（北西から）



5　第１トレンチ　上部葺石（南から）



6　第１トレンチ　下部葺石（南から）



1　第２トレンチ　全景（南から）



2　第２トレンチ　北壁・東壁（南西から）



3　第２トレンチ　葺石（南から）



4　第３トレンチ　全景（西から）



5　第３トレンチ　東壁・南壁（北西から）



6　第３トレンチ　東壁（西から）



1　第４トレンチ　全景（西から）



2　第４トレンチ　南壁（北東から）



3　第４トレンチ　南壁（北西から）



4　第５トレンチ　全景（西から）



5　第５トレンチ　南壁（北西から）



6　第５トレンチ　東壁（西から）



1　第６トレンチ　全景（西から）



2　第６トレンチ　南壁（北東から）



3　第６トレンチ　東壁（西から）



4　第７トレンチ　拡張前（東から）



5　第７トレンチ　拡張前上面遺構（東から）



1　第７トレンチ　全景（西から）



2　第７トレンチ　南壁西端（北東から）



3　第７トレンチ　南壁（北東から）



4　第７トレンチ　南壁（北東から）



5　第７トレンチ　東壁（西から）



6　第７トレンチ　上面遺構（北から）



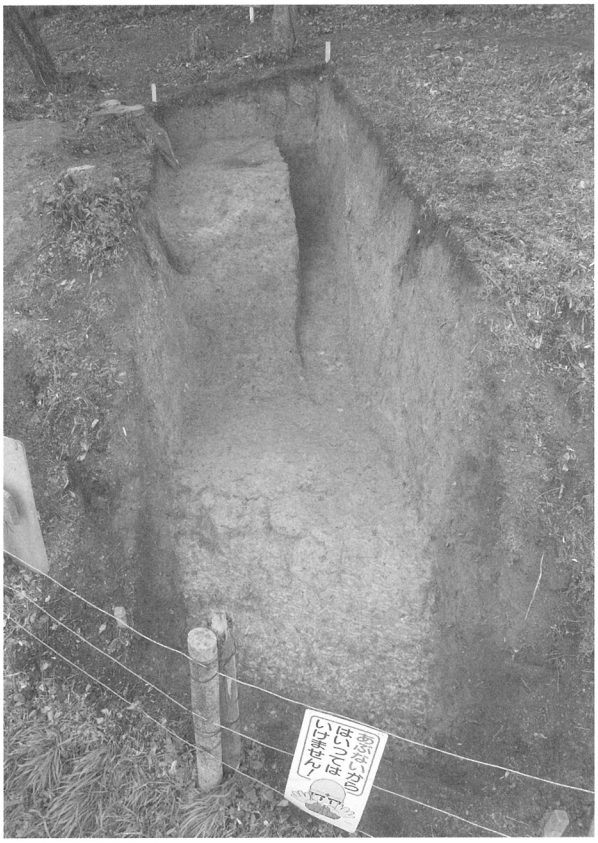
1　第８トレンチ　全景（西から）



2　第８トレンチ　南壁（北西から）



3　第８トレンチ　東壁（西から）



4　第９トレンチ　全景（西から）



5　第９トレンチ　南壁（北西から）



6　第９トレンチ　南壁（北東から）



1　第 10 トレンチ　全景（北から）



2　第 10 トレンチ　南壁・西壁（北東から）



3　第 10 トレンチ　東壁（北西から）



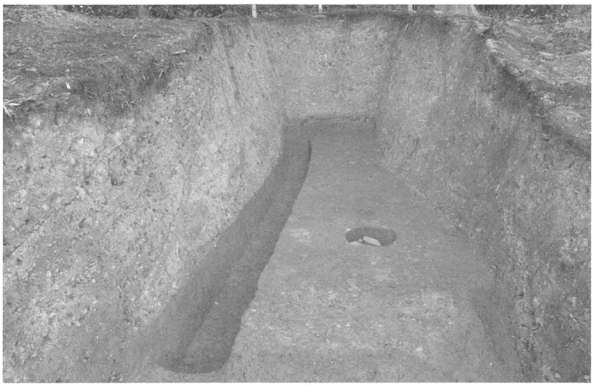
4　第 11 トレンチ　全景（北から）



5　第 11 トレンチ　上部（北西から）



1　第 11 トレンチ　東壁（西から）



2　第 11 トレンチ　南壁（北から）



3　第 11 トレンチ　遺構（東から）



4　第 11 トレンチ　集石（北から）



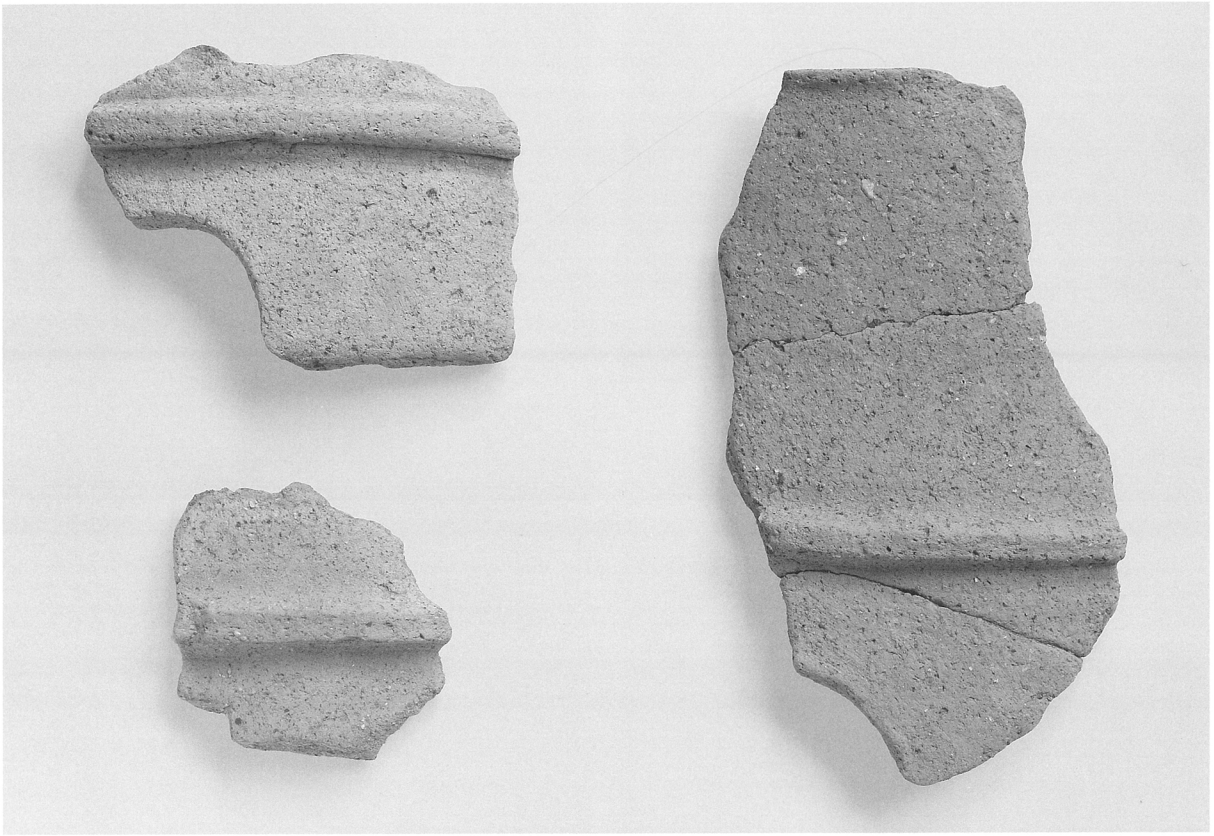
5　第 12 トレンチ　全景（東から）



6　第 12 トレンチ　南壁（北東から）



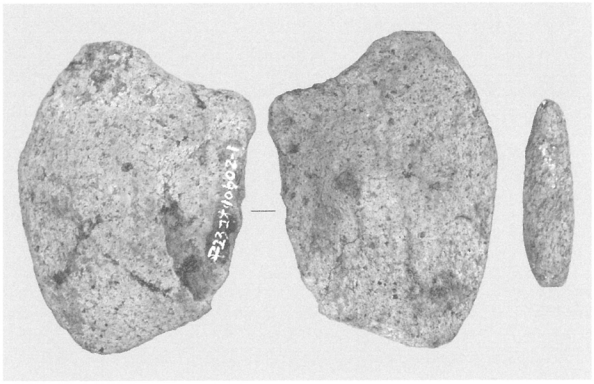
7　第 12 トレンチ　西壁（東から）



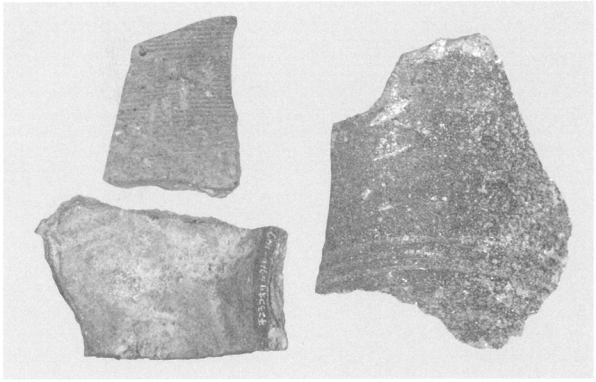
1　円筒埴輪



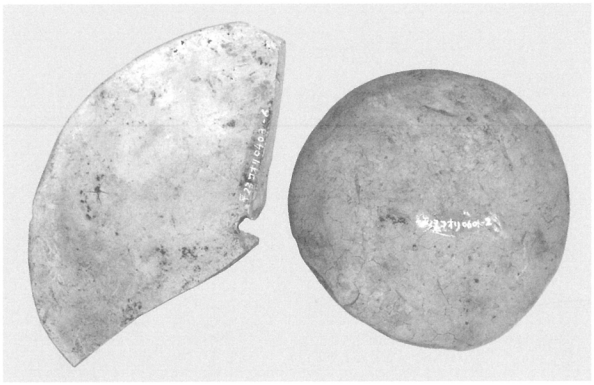
2　形象埴輪



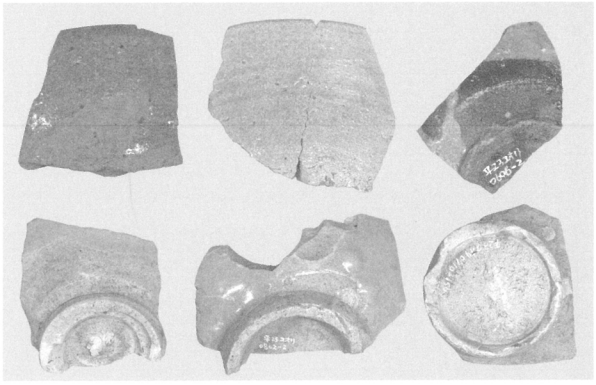
1　笊形土器・土製品



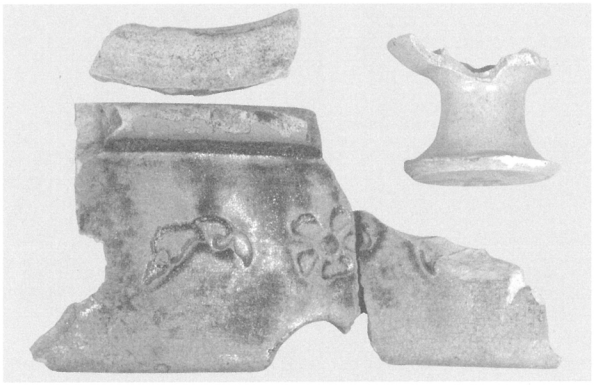
2　須恵器



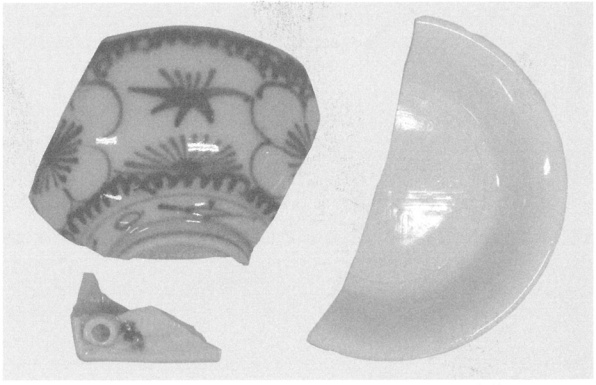
3　土師器



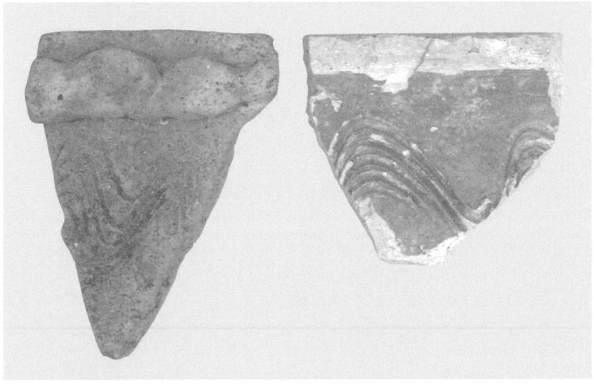
4　陶器



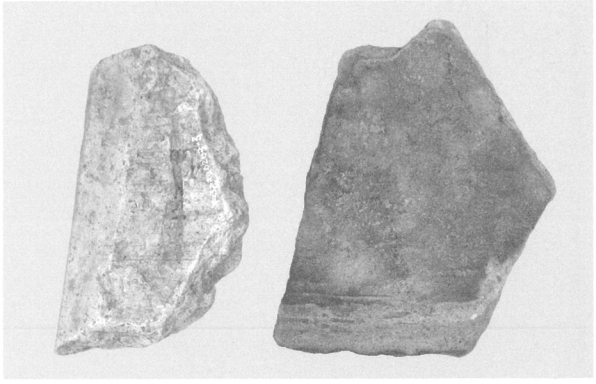
5　陶器



6　磁器



7　瓦質土器



8　瓦